女報

明治[illegible]十八年十二月二十四日發行

第四號

東京國光社

女鑑第百號

目録

孝女玉野



家庭教育に於ける感情の勢力

家庭教育の要は智育よりは、寧ろ德育にあり。智育は出でゝ小學校以上の學校にて、之を受くるを得べしと雖も、德育の基礎は先づ家庭に於て之を作らざるべからず。所謂氏よりは育にて、三歲兒の心百までもかはらず。幼時の習、性となりて、後、いかばかり社會の教育をうくるも、人物性格は、容易に之を改むること能はざるなり。さればとて、家庭散育に智育を要せずといふにあらず、唯德育を先にすべしといふのみ。小兒は多く質問を好むものなり。一つ話を聞かすれば、必ず「それから先きは」と問ひ、少しく分らぬことあれば、「何故」と問ふが常なり。これ實に喜ぶべき事にて、將來深く學問を研究し、眞理を窮むるも、此「それから先きは」「何故」といぶかる心より出づるものなり。「何故々々」とあつかましく質問する小兒ほど、賴母しきものはあらじ。さるに、世の父母たるもの、かゝる質問を五月蠅がり、小供の癖に小癪なとて、十分なる說明を與へず、頭でなしに叱りつくるものなしとせず、こ

れ小兒の智能を啓發する所以にあらざるなり。小兒は好奇心つよきものなれば、何事も質問したきが常なり　親たるもの　單に面倒なりとて　此好奇心をくじくべけんや。

小兒既に質問を好む、父たり、母たるもの、之れが質問に答へ得る資格なかるべからず。雷は何かと問はれて、鬼が太鼓を打つなりと答へ、地震は何かと問はれて、地下の鯰が尾を掉るなりなど答ふるは、尋常教育なき母親の往々爲す所にして、小兒の智能を害すること少からず。女子も一通りの學問あるを要するは、家庭教育の主任者なれば也。女子の學問、固より深からずして可なれども、日常普通の事件に說明を與ふるだけの學問なかるべからず。英雄の子には往々豚犬あり、されど、賢母の子は多く賢なり、蓋し母は家庭教育の主任者にして、常に小兒に接するものなればなり。

かく親たる者、相應の學問ありて、小兒の智能を啓發すべしと雖も、家庭教育は理屈を以て甘んずべきにあらず、理屈は冷かなるものなり、實行の動機を起す力、至て弱し。家庭の間、教ふるに言を以てするよりは行を以てし、冷かなる理論を以て

するよりは、溫かなる感情を以てすべきなり。何故に君に忠を盡さゞるべからさるか、何故に親に孝を盡さゞるべからざるかは、理論を以て之を說くを得べし。小兒たるもの、また理論上之を了解するを得べし。されど、天下の人誰れか忠孝の大義を知らざらんや、而して、眞に忠臣たり孝子たる者極めて少きは何ぞや。之を知ると之を行ふとは大に別あり　之を知るは、理論を以てすべし。されど之を行ふは　理論のみにては足らず、深く心を動かすものなかるべからざるなり。

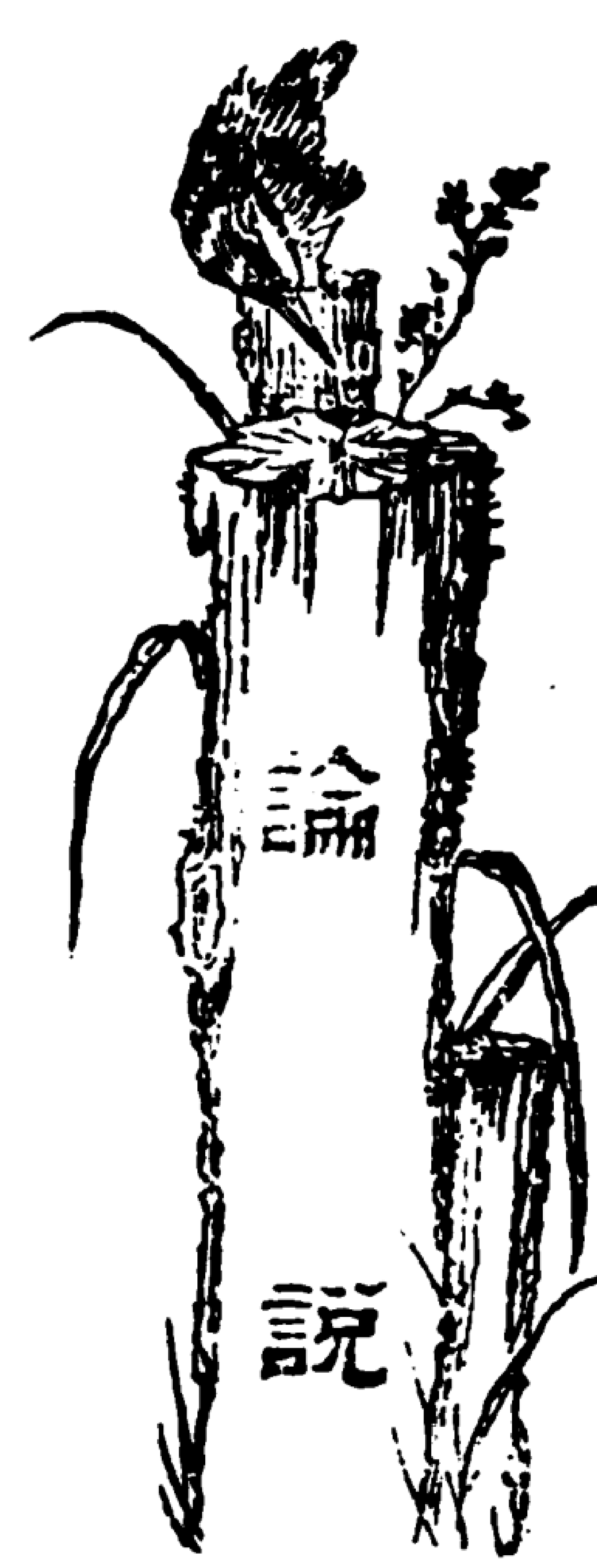
家庭敎育の主任者たる者、其の親に對して孝養の道を盡くし、子に敎ふるに言を以てするのみならず、次ぐに淚を以てせば、子たるもの安んぞ動かざるを得んや。況んや摸倣を好む小兒に於てをや。孝悌の道は實に不言の間に行はるべきなり。又舌をからして、忠君の道を說かんよりも己れまづ忠君の行を示すに如かず、御容璧にかけて朝夕之を敬禮せば、誠心の餘風、また小兒の心を化せむ。理は智によりて明かに、事は情によりて決す。家庭敎育の要は、情によりて實行を期すべきなり。

昔、兄弟財を爭ふものあり。官に訴へて數年決せず、熊澤某來るに及んで、兄弟を呼んで之を一室に置き、敢て鞠問することを爲さず、唯己れの子の兄弟が、相共に

友愛して能く親に事ふるさまを目擊せしむ。時正に冬なり。室の中央に一の火鉢を置く。財を爭へる兄弟、始は各一隅に坐はりしが、寒さに得堪へで、兩方より火鉢の處へ寄り來り、一口話し二口話し、情誼日を追うて密になり、また態澤兄弟の友愛のさまを目擊して、翻然として悟る所あり。遂に深く相和合して訴訟自からやみたり。嗚呼一片の實例は、千萬言の空論にまさること、實にかくの如きものあり、徒に理論を以て人を教化せむとするもの、之を以て鑑とすべき也。

あらたまの
としのくれこそ
かなしけれ
むかしのとほく
なるこゝちして

（水屋集）



誠は必ず貫くものなり（つゞき）

玉能舎主人伊豆雄

斯くて丹三郎と阿石の二人は、實に意外なる出來ごとなれども、如何にせん。前の疑ひの漸く晴るゝやいなや。まだ日も立ぬ間なるに、又しも斯る言ひ譯の立ぬ事の出來りては、迚も脱るべき道無れど、忽ち身上の大事に及ばんこと云ふまでも無きより、何の思案をするまゝも無く、其儘其所をぞ立去りしが二人共に夢路をたどる思ひにて、其夜は四谷まで立退き、爰に少かの緣故あるを賴みて、暫く忍びて居たりしかど、兎角江戸表には、長き住居の成難きより、何處へなりとも身を隱さむと思へども、元來不慮の出來事とて、路金とても無れど、せん方なさ、淸島も斯る日影ものと成果ては、最早武士道を立むこと思ひもよらざれど、今は此大小も何にかせんと思ひ切りて、刀脇指を賣代なし、五兩二分の金を得しかど、之を路用となし、箱根の温泉場なる宮の下に、聊の知音有りけるを便り、同所に立越し、其知音を賴みて、細き借屋をかり、厚鬢を薄鬢に剃落し、全く平人の姿となりて、刻み烟草を賣れど、阿石は縫物の上手なるより、これも仕立物を受合けるにぞ、丹三郎が拵よりも、阿石の針の廻りよくて、二人緩やかに今日をぞ過しける。

斯て或時丹三郎阿石に向ひ云ふやう、御身と我等とは、誠に不慮の災難にて、かく成果しも、思へど前生よりの約束事なるべし。今更に返らぬ繰言して、心を傷めんも無益なり、最早斯く成果ては、迚も明りの立べきやう無れど、此上はこれに應ずる二人の覺悟を決むるの外無し、唯人の知ぬ苦勞のみして、徒に老果んも誠

に言ひ甲斐無き事なり。今はいつその事、我を夫と思ひ給へ。我も亦御身を二世の妻と思ひ定めて、二人共に心安く日を暮さんこと、せめての慰めならめと、面赤らめて云へど、阿石は之を聞て、大いに驚き此は思ひもよらぬ仰せかな、誠に御詞の如く不慮の災難にて、斯は成果たれども、御身と我とは元來不義にあらず。縦令一生顔見ことならすとも、我には正しく頼母と云へる夫有り。此世にては曇を晴す由無くとも、未來にては必ず明りを立んと思へどころ、朝な夕な怠ること無く、天地の神かけて、祈り奉りては有るなれ。今更御身と夫婦とならは、是迄のことも皆實となるべし。如何に口惜くは思召ずや、然れど前生よりの約束事なりしとは云へわらは故に、御身も流浪の身と成給ひしは、如何ばかりか心苦く思召すらん。然り迚外にせんすべ無れば、我身此世に在ん程は、糸針取て身を碎きても、御身をみつぎまゐらすべし。唯妹背の事のみは、

決めてゆるし給はるべし。人の心は闇けれども、天地神明は明かなり。其耻しさいかばかりぞや。御身も今に至りて斯ることをのたまひ出給ふは、前の御詞に違ひていと未練に聞ゆるなり。然は云へ、御身は男振も美はしく、心ばへも和らかにして、人に思はれ給ふ風にませば、わらはも好きまゐらす所は、夫よりも彌增て思へど、其は一通りの上の事なり。一度頼母と云へる夫を持しわらはなれば、縦令不幸にして死別れたり共、再び他夫に見ゆべきやう無し。況てや其夫の此世に在る上は、猶更のことにて、譬へば此上頼母が若癩病乞食の身と成給ふとも、わらはに疑ひを晴して、呼返し給ふとならば、其嬉しさ如何ばかりならん。手鍋を提げ落穂を拾ひて成共、介抱しまゐらせんと思ふは、即ちわらはが本心なり。此本心ばかりは、よしや此身は火に燒れ、水に沈めらるゝとも、毫も動くこと無しと、道理を盡し、色を正して答へければ、丹三郎も甚

く耻入り。扨々御身の如き貞女は、我國はおろか、唐土天竺にも、又とは有まじ。然りとは實に誤り入りたる次第なり。此上は斯る妄念は再び起し申すまじ。必ず必ず心を安め給ふべし。夫に就ても、御身の如き操正しき心底にて有りながら、斯る災難に遭ひ給ひしことの訝かしさよ。世には神も佛も無きものか。此を思へど、彼菅家の遠流に逢ひ給ひしも、有まじきことゝは思はれずとて、深く心に感激して、其後はかりそめの戯言だに言ふこと無く、表向は夫婦のやうに見ゆれど、夜は一間を隔てゝ臥床に入り。禮儀正しき中に、打和らぎて物語りなどし。中よく暮すさま、餘所の見る目も麗はしく、爰にて三四年を經る間に、物言ひなど云ゝことは一度だにも有らざりしとかや。斯て又江戸表にては、彼家老木村某が娘はお岩と云ひけるが、幼少の頃より國許に遣はして、或方に嫁せしめてありしに、不幸にも其夫に死別れて、寡婦となりしまゝ、猶國許に在しが、其後間も無く親元へ歸り來れるを、未だ年は若し、木村某も親子の情として、氣の毒に思ふに就ても、賴母が此頃無妻なるに心付、幸ひの事とて、相談を調へ彼お岩を賴母方へ後妻に遣はし、婚姻の禮整ひて、是亦中睦じく、暮しけるとぞ。其後木村某少か病のありて、彼宮の下へ湯治に趣きけるが、木村某が借たる座敷の、唐紙一重隣の一間には、是も侍と見えて、若き人兩人、此は餘程先より來り居ける躰なり。然るに彼丹三郎、今は刻み烟草賣の喜八と云ひて口合よく、湯治に來る者に愛せられて、商も能く出來、其上碁將棊の相手などして、商ひがてら我も慰みけり。彼木村某が隣座敷の若侍兩人も、常々喜八を呼びて相手と爲けるが、一日喜八が烟草を持て來るや否や、一人の侍聲をかけて、喜八能く來りたり。今日は一昨日の意趣返しを爲べしとて、下婢を呼びて碁槃を持來れと命じ、其を待間に、時に喜八昨日烟草が

切れたる故、其方が許へ尋行て見しに、扨々其方は能妻女を持たり。此方は一たび拜顏してより、目前にちらつく心地して忘られぬ姿、實に其方は果報ものなり。是程羨しきことはあらずなどと、戯ぶれて言ひければ、今一人の侍もこれを聞て、其は話を聞だに羨るゝなり。我等も尋ねて、責てのことに、其御面なりとも拜せんと言へど、喜八申すやう、必ず麁相を仰せらるべからず。彼は全く拙者の妻にはあらずと云はせも果ず、是は嘘を云ふ人かな。我妻ならぬ女と二人暮のなるべきやは、其は兎も角も今晩は必ず近付の爲に、我等兩人相伴ふて參るべしとて、二人して喜八を嬲れど、喜八は彌眞面目に成て、少し聲を細め、御二方の我詞を信とし給はぬも無理ならねど、此は全く僞りならず。彼はいと堅くるしき女なり。若戯言など仰せられて、耻かき給ふことなどありては御氣の毒なりと思へど、斯は實をも申すなれ、今は何をか隱さん、聊か憚る所あれど、本名をこそ申されね。我等も元は武士の片端に居たるものなれども、不慮の間違にて斯淺間敷は成果たり。實は彼女は我等が極めて入魂なる友人の妻なるが、斯樣〳〵の間違の二度まで重りたる災難に遭て止事を得ず、二人共に欠落し來れるものにて、今となりては、迚も此身の上の明りの立べきやうなく、一生垢を拔べき由無きに、人に知ぬ道を守りて、苦勞のみするも益無きのみならず。毒喰ば皿までねぶれと云ふこともあれど、今は何事も思ひあきらめて、我妻にもなれかしと申したれど、彼女色を正して、斯々と申し道理を盡して我等を耻しめたり。我等固より一言返すべき詞も無く、唯耻入たるのみにて、其後は苟のたはふれだも申さず。既に四年餘り一所に暮す間、其行儀の正しき狀、更に一點の申すべき節無く、折に觸ては斯る貞女をして、我等故に、此災難に罹しめたることの氣の毒さよと、思ひ餘りては、人目を忍びて

男泣にも泣るゝこと屢なりと、始終の事ども、逐一に物語りければ、二人の若侍も、始の戯言は何時の間にか消失て、感涙止め敢ず、扨も世には珍らしき貞女も有るものかなと、驚き入て聞たりとぞ。（未完）

女子教育一班（九）

三輪田眞佐子

思ふに教育の要は人類の道、國民の分を知らしめ、安全なる生活をなさしめんためのものなれど、必ず時勢と相伴ふべきなり。蓋時勢は常に時勢に適合する人物を求むるものゝ如し。史を繙きて見るに、世の亂るゝ時代には、能く槍を使ひし富田信高の妻、善く矢を射し板額の如きもの、まゝ武家より出でしなり。これは時勢の然らしめしによるならんかし。されど明治今日の時勢は、果して如何なる女子を求むるか。そも〳〵

國内の平和を維持するに足る仁愛、及び國威を國外へ發揚するに足る元氣を、民人に與へ得る女子の徳を養ふところ必要なれ。まことや現今の女子教育はかゝる女徳を養ひつゝあるかきかまほし。

熟ら〳〵現今の女子徳育を見るに、かゝる重大なる目的を達すること、覺束なしと信ずるなり。さて物には結果あれど、必ず原因あるべき理なるを以て、今其の覺束なき由を尋ぬるに、第一父母若しくは兄等、總て女子を教育する責任ある位置の人、多くは女子の徳育を如何にすべきかを知らず、從ひて中庸の標準を得ざるに由るめり。今斯る人を二派に分たんに、其一、女子の心底如何にあらんも、唯起居方あり、言語和く、糸竹の道に通じ、香花茶湯のことさへ知りなど、淑女と思ふものすなはち、舊慣墨守主義の人々なり。其の二、女子なりとも、男子同樣にろの名分を尊び、權理を正し、恒に基督を信じ、公然の慈善に奔走するもの

を以て、滿足するなり。彼等は西洋心醉者流なり。蓋し此等は及ばざるものと、過ぎたるものにして、兩つながら識者の是認せざることとなるべし。

第二、幾年前に行はれし教育主義の反動なり。さて其の頃の女教は、浮華に流れ、虛飾を尊び、專ら智育を偏重して、德育を遺棄し、英語大に盛り、舞踏さへ學びけるより、意氣揚々新物の美を賞め、古老の耳を驚かし、遂に憤慨せしめしほどなりしが、やがていふも忌むべき、醜聞の四方に起りしのみならず。獨立生活、自由結婚、婦姑別居、男女同權、などの議論起りしかど、天下の人擧りて、女子教育の弊を叫びき。其の聲にや恐れけん、女學生、漸々數を減じ、從ひて女教泯々たるに至りぬ。唯今に至りては、稍實着の傾きをなすに至りたれども、なほわかぬ心地ぞする。如何となれど、其一、前車のくつがへるは、後軍の戒となるべけれどにや、公立女學校は、敢て特色を顯はさず、唯機械的に智識を傳授するのみなり。そは教師は全く官吏なるを以て、定めの時間をば勤めなば、表面の義務ばかりは、足るべけれど、唯相當の學術だにあるものは、その身の操行如何を問はざるなり。然るに德育は、教師より藝能のみを受けたりとて、德心を養ふに足らず。眞に教師自身を活摸範と仰ぎて、萬端の行これに擬して、こゝろの進歩著しかるべけれ。もし幸に善良なる教師、その任にありとせんも、斯る學制の校にては、鈴なりて教室に入り、亦鈴をきゝて、出るものから、教師と學生の間、大に疎隔して、さながら越人の秦人を見ることく、顏だに記臆すること難き姿なれど、風化の功絶えて、なきなり。これ女德のすゝまざる所以ならむ。其二、私立女學生には、かくの如く、教師と生徒の間は、疎遠ならざれど、目下の事情を見るに、善良なる學校は稀なるめり。そは資本の乏しきに由るらん。おもふに射利的の女學校は、諌

言耳に逆ふ道理により、敎則嚴しくするときは、入學するもの少きものから、唯々生徒の歡心を得ることのみを勸むるを以て、勢ひその生徒は放姿の風をなし、折角の修學なるもその德育には、寸功なきなり。あな心足らぬことなりけり。さりとて目下最も多き宗敎を布かんための女學校は、いはずとも明なる如く、その目的單に良妻賢母とするやうに女子を敎育するために止まらざれど、聊か宗敎的信向心は養ふに足らんも、日本女子の德操を益することなう、反て國情にもとらんかし。

おのれ聞く、西洋の女學校は、敎師その生徒を率ゐて、彼等の信ずる神といふものに、朝には邪見を去らんことを祈り、夕には福音を聞かんことを願ひ、食するときも神に謝し、就褥のときも神に禮すること通例とかや。これかゝる國にとりては、大によからんも、我國は必ずこれに倣ふべからざる理由あるなり。さりとて、これにもなほ勝る德育方あるかなしやと考ふるに、我國の女學校には、修身科なるものを設けて、經書を講じ、并せて史上の美談を敎ふるに、思ひきやそは欠伸の種となり、睡眠の因となり、これをあくもの多きとは、且つ西洋哲學中の倫理學を講ずる女學校もあれど、惜かな實踐しがたきものならんとは、あはれ我國女子の德育を如何せん。將た我國運の前途を如何せん。

或人曰く、從前の女子德育は自ら女德を啓發せしむるにあらず。これを壓抑して直からしめしを以て、おのづから卑屈に流れ、懦弱に陷りけり。そは未開壓制時代の女子には、適當の敎育制度ならんも、今日には如何はしきなり。例へば祇王が女子は五障三從の罪深けれど、早く世を遁れんとて、嵯峨の奥なる山里に、柴の庵を引き結び、念佛して往生を遂げしとぞ、聞えしは、かゝる時代なる女子一般の心中を推しはかり得し、云々とおのれ固より敎訓は自悟することそよけれ他

より施行せられて、從順の樣を裝ふは、あしからんとぞおもふ。むかし漢の武帝の后なる班姫か寵愛衰へけるときの心情を、詩人ありて、西宮夜靜百花香、欲ㇾ捲二朱簾一春恨長とか、將た却恨含ㇾ情、掩二秋扇一、空懸二明月一待二君王一、とかと寫せり。實に古の女敎は常に抑壓されしを以て、表面は柔順なるも內心は不平に充たされしと思ふに足れり。欠點はなきにしもあらず、されど今日は全く古の敎を實行するものなきのみならず、一もよるべき訓なきを以て、さかしきものは、奔馬の如く、にぶきものは傀儡の如し。昔に劣れること幾むくぞや、まことや、今年も、はや過ぎなんとす。いづれの時か良法定まらむ。





孝女玉野

鹽井ふく子

蓮は淤泥に出でゝ、淤泥に染まず、花の君子と呼べるもうべや。人の心は、多く境遇によりてかはるものなるに、玉野といふ孝女の如きは、世に類なく、その親につくしゝ誠心は、げに女子の龜鑑たり、其身の賤しき川竹の流に沈みしと、末路尼になりしとの故を以て、之をすて難くや。

京都團栗の辻に、烏の婆と異名を呼べる者ありけり。始めやんごとなき方の家に、みやづかへしてありけるが、性吝嗇にて、人のあなどりをもかへりみず、勤の内に若干の黄金をたくはへ、局のみまかりて後、兄の

魚商にてありけるが家へ、身を寄せたりしが、その兄、戸毎に魚を賣りありきて、僅かなる利を得て歸り來れるを見て、或日、兄に向ひて云ふやう、かばかりの小利を得むとて、あしたより夕まで、重き荷をになひありきて、骨身を碎かんよりは、わがたくはへたる黄金を人に貸しあたへて、其利を取らば、はるかにまさりたる收入あらむ。勞せずして功多きことをなし給へなどすゝめ、己も亦數多の金を懷にして、夏のあつき日もいとはず、冬の寒き夜もたゆまず、身を粉に碎きて、三昧のあたりまで走りありき、朝に貸したるを夕に、夕なるを朝まだきに、行きてはせがみなどして、貪欲非道の行ひのみなしけれど、人々烏の婆と呼びて、人の數にもかつまへざりけり。されど此の烏の婆は利欲にのみ目くれて、人の譏りは馬耳東風と聞き流し、なほ其の上に、人の兒を貰ひ、養育にそへたる黄金を貪りて、其の子ははぐゝみもせずして、飢へさせ死なしなぞする故に、人またこれを知りて、子貰ひ婆と呼びのゝしりて憎む事大方ならざりしとぞ。或時また例の如く、人の捨てんといふ女の子を、金と共に貰ひうけて、懷にして家にかへりしが、如何なるゆかりにか、その子誠に美貌にて、このおそろしき老婆を見て、うちほゝ笑み、はいまつはる愛らしさ、云ん方なきに、流石の惡婆も感じ入りて、人外の邪心をひるがへし、飢させ殺しなどせし惡念を全く忘れて、思はずもねんごろにはぐゝみいたはり、晝は其の子をかき抱きて人に乳を貰ひありき、夜はすり粉をすゝめなどして、心を盡くすこと一方ならず、しろがねも、こがねも、之に替へん寶はなしとまでにいつくしみ、はへば立て、立てば歩け、生ひ先きを樂しみて、十年あまりの年月も、唯一日の如く育てしかど、その子いとうるはしう成長して、烏が鷹の子を育てしなど、人々にも云ひはやされ、玉の肌、花を顏、世に類なき美人とはなれり。實

にこの女兒、顏のみ花にはあらず、姿のみが玉にはあらず。心も誠に玉の如くうつくしう、花の如くやさしき孝女玉野とは、やがて此の少女なりけり。

人の性はもと善か。かの老婆、一度は嬰兒の愛慕に、邪惡のこゝろをひるがへしたり。されど、其の子容色嬋娟として、世に絶倫の美女となりたるを見て、又もや獸心の惡婆にたちかへり、愛想の忽ちやぶれて、養育したる丹誠をほこりがに、しらぬ他人の妻になさむよりは、妓女ともなし、わが身の左り團扇にて樂しまむと、淺ましき心にまかせ、專ら歌舞音曲を習らはせ、遂に遊里に出しけるに、人々こぞりて、之を譽めそやし、寵するもの愛顧の客のいやまさるにつけて、老婆は今はねたましく思ひ、玉野が起居、はしの上げ下ろしにも、しかりのゝしり、衣服なども表むかりをうつくしうかざりて、裏には木曾の麻布をつゞりてきせなどするに、玉野はつゆうらます、子で子にあらぬものを、今まで養育せられたる厚恩のほどを、ひとへによろこびて、またすてたる親をも怨まず、たゞ己が不徳なることを歎きて、呵責にうたるゝ笞にも、なかゝゝに老の力の手弱きをかなしみ、不義に隨ふ貪者には、衣の蜂もしりつゝ拂ひ、出でゝは母の徒然を氣遣ひ、入りては薪水の勞を取り、洒掃より始め、寢食など至らぬ方なく、こゝろを盡くし、何事も養母のいふまゝに背かず、さからはず、一筋に子たるの道をつくしゝは、泥の中に生ひ出でし、蓮の花にもたとへつべし。

ある時、豪富の商人、玉野が美麗なるをもて、己が常に出入する貴人へ諂のため、玉野に數金を與へて、樓上へ誘ひ行きて媒せむとするに、玉野は母のいやしき手に育ち、いやしきなりはいはなすとも、いと氣高き少女にて、元より浮草のうきたる心はつゆもたず、かつは親の知らぬことをとて、固く辭みて、逆はん事を許るさぬに、商人は一間に伴ひて、さまゞゝに説きす

すめけれども、玉野はさきに云ひてしことを固く守りて、うけがはぬに、商人はやゝいらだち、是非にとて、いきまきあらく迫るに、玉野はいまはかなはじと思ひて、襟をくつろげ、裳をもたげ、肌着をあらはし、斯るつゞれを纏ひ居れど、今宵御客に逢ひまつりて、此のきたなき裏衣など見られむには、客の愛を失ふもとにて、たゞに妾のうへのみならず、また妾の母の辱耻になむ。願はくば夜明けて、衣服をもあらため、母の命をも待たせたまひねと云ひて、得たへず袂に涙を包みけるに、商家の主人も、ひたすらに感じて、其の夜は客を歸しけり。客は二人の話し居りたりしを、陰よりほのかにうかゞひて、こは必ず二人心を合せて、已の財をたばかり貪ばるならむと思ひひがめ、あくる日の夕べ、樓へは約をたがへ、從者に下知して辻に忍ばせ置き、玉野と商人とを害せんと謀りけるぞおろかなるや。玉野は幸にそこには居らず、客は、商家の主人と、烏婆の物語して居りけるを殺害して、何處ともなく失せたり。

玉野は斯くときくより、おどろき悲しむ事一方ならず、己れ不德にして稚き折りに生みの親に捨てられ、今までもかくながらふるは、一偏に養母の深き情によるものを、その大恩をも報ひ得ず、剩つさへ知らぬ事とは云へ、妾故に御身を亡ぼしまゐらせしこと、誠にかなしく、あさましく、申しわびむ言葉も知らず。如何なれば、かゝる不孝の子とはなりしぞとて、母の亡體にすがりて、繰返し〳〵、返らぬことをかこちて、涙にくれたりしが、人々に慰さめられ、おもひ返して漸くに野邊のおくりをすまし、切めては母の恨みを報いて、不孝の罪をあがなはむとて、其の儘我家をかけ出で、敵の樣子をうかゞふに、都にはあらで、浪華に逃れしと聞き、またもや彼處に赴きて、さしも美くしかりし面を焦がし、姿を變へて、忍び〳〵てさま〴〵に力を盡

くしてさぐり、辛うじて其の男の、人の葬を送りしかへりを待ち、母の怨みを漸くに報ひ、廳にうつたへて其の首を請ひ、都に返りて母の墓前に手向け、遂にみどりの黒髪をも剃りおろし、生きて孝養を盡くし參らする事のかなはざりしかど、切めては亡きあとをともらひ申さむとて、それより尼となりしとかや。今その土人等が、烏が墓と呼びなすは、實は此の孝女玉野を葬りし跡なりとか云へり。嗚呼鬼の子に佛とは、實に此の玉野の如きを云ふべからむ。

小野寺重内の妻

山川清素

花の中の花とうたはれ、武士の内の武士とあふがれて、万代の後にも香花の烟たゆることなき泉岳寺内の四十七士、其の高義大節には何れを何れと品はなけれど、なかに小野寺重内秀和は武邊の外に、敷島の道をも深くきはめて、清みわたれる雲井の月におもひを寄せ、流れ行く清水の音に心をかよはせ、憤怒の炎やる方なき三年の春秋を、このうちになぐさめて、やう／＼すぐしたりけり、之にたぐひたる妻丹女、其の節操のかぐはしきは、更にもいはず、流石、重内の妻と其良人とおなじく、其の道をたどりては、中々にゆかしく、なつかしきふしのみおほくて、其の風流優雅すくへど水中の玉よりも美しく、酌めど谿間の清水よりも清らなりけり。

不倶戴天の恨、骨髓に徹し、君耻かしめられたる憤怒の炎、心頭にもえて、苦といふ苦、艱といふ艱はなめつくしたる三年の年月に、期やう／＼熟し、時はじめて至りて、積年の宿憤もはれむとぞかり、いさみ立ちたる夥多のはやり男、あまりにはやりすぎて萬一、敵にさとられなむ、年頃ひめにひめたる謀計も、一朝の畫餅とやならむと心つかひて、大石主税良金に從ひ

て、いそぎ東に下りたる小野寺重内、先には玉ともめでし娘をさきだてゝ後には柱とあふぎし母におくれて、悲歎の涙やるせなき、程なるに、さりとて君國の大事、一刻も猶豫ならじと妻丹女を一人都にとゞめおきて立出でたる重内の心おもひやるだにあはれは深かり。

まして、此の時の丹女の心果して何所の空をやたどりけむ、子に別れ。親に放れたるだに、吾も共にと亂れたる玉の緒の、今又良人をあらぬ東に旅立たする、其のかなしさ、常ならでわびあふはどのいかに待ちどほしかるべきとも、こらへむすべもあるべく、去のばよすがもあるべけれど、之は又一度わかれてはふたゝびあふよしのなき死別をかねたる生別とおもへば、公義の爲ぞ、君國の大事ぞと私心をばおさへながら、流石ははかなき女心のいつまでかくてはながらふべきと、まぎらはせども、わき出づる兩眼の涙に、たよりなき身は浮きやすむ。家も身も浮くばかり泣きくづをれたりとも、今はかひなき身の、せめて良人のおもひを果し給ふ日までは、天雲のよそに心を任せ、行く水の流に身をなして、たよりあるをりをりは、かぎりある良人の安否をとひまゐらせて、長からぬ良人の御心を慰め參らせん、かくて一味の面々、うれしくも本望とげ給ひしときかば、我もゆかりある身の、何か此の世におもひおく事のあるべき、今宵や打入給ふらむ、あすや其の噺あらむと丹女は夜もすがら夢も結ばで待ちあかしたることもありけむ。

重内は又復讎の期近づきたる昨日けふ、西に走せ東にかけりて、肝膽をてらす折から、筆とるいとまとてはなき身ながら、都の妻をおもひやりては、流石に情にとめる心のもだしかねて、やさしき筆の跡にかずかずの心のほどを示して、丹女の心をなぐさめけり。

一十六日までの便りくはしく、逢見たる心地にてまき返し、そろそろ見申候、そもじ以前の如く左の胸下痛みて左りを敷ては、寢ることも叶はず、脉も勞れたるとて、慶安殿藥たべ申され候よし、もつともにて候、氣の勞れ嘸その筈にて候、何事も思ひても身弱りては、ならぬ事にて候、便り少き身になり候へど、健にて世を渡る事、肝要の覺悟にて候まゝ、病をれすことなく能々藥呑て、可被下候、心からいかふれところへ申さるべくと、すもじ致し一入痛しく思ふ斗にて候。

一此方の歌とりわき逢坂の歌、あはれのよし能く聞き給ふと存じ候、其天の歌さて〳〵感じ入りま〳〵是につけて、必らず歌を捨てなくて絶ゑず、詠み可被申候、歌ども透間に書きてれくり申ま〳〵、道中にては草臥ても外に紛るゝ事なくて、歌をも案じ候へども、是に着ては五十人にあまる同志の人々、入替り入替り、毎日出會て心のひま一寸もなく、獨り靜にして居ることなくて、歌もとりしめて案じならず候、只見ることと聞くことにまで、そこもとの有樣を思ふばかりに候はんと思ひやりて、いにしへ世にありし時、中島文藏が留守を見るやうにこそと思ひくらべ申候、思ひても言ふても、盡きまじく候、筆にも及ばぬ事に候、

一骨折る事もなくて、酒呑み肴喰ひて、一日をくらし申候もや着物の袖口も切れかゝり申候、裾も少々破れ候へども、誰も賴むべき方もなく、今少しの間と思ひ着申候、裏のほころびは今日幸右衛門に縫はせ申候、夜は寒さに着物どもを取重ね着申候、晝はたたみて置き、入用の時ばかりの晴にとたしなみ申候、そもじ着今一つ持て往けと御申候に、持て參りよかりつるものをと、今思ひ申候、去ながら親子の裝束きれいにて、せめて心よく候、

一我等主税どの丶宿へ移り申候、今迄の所にてはなくて、幸右衛門とは少々隔る方へ參り候、先々今日迄達者にて候まゝ、心易るべく候、其元何かも悟り心づよく暮し申さるべく候、いつの日如何なることを聞かんとのこと、尤にて候、今も如何なる事を聞きたると思ふ心に成りて居可被申候、又々文遣はし可申候、人多く候まゝ此文も幾度にか認め申候。そろ〳〵見可被申候、返事とても此方より言ひ遣りたることを、皆片端より返事に及ばず候、其元の入用のみを御申越候べく〳〵かしく。

などあるを見ては、丹女は日頃良人のなづかしき温容に接したらむ心地して、如何に嬉しくも哀しくも、かきみだれたりけむ。

一筆申入まゐらせ候、此ほど登せ候文届き申候まゝ、此元の左右今や今やと待給ふらむと、其心のうちおし計りまゐらせ候、此許の事やうやう時至りまゐらせ候、此上いかなる大變あらむは、格別かはりたることとなけれど最早けふより三日は過申まじく候、二年のうち我人幾そくの心づくし、身をくだき申候甲斐ありて、此時節にいたり候事、先々是迄をも本望と悦び勇ましく先にも嘸心あるべけれど、勝負は互の天運次第にて候、兼ても申ごとくに公よりいかやうの御咎めにて、たとへ屍をさらされ候ても、少しも恨とも物うしとも思ふまじく候、忠義に死したる體を天下のもの丶ふに見せて、人の心も勵まさん事却て本望にて候、斯の如くの心ざしにて候まゝ、夢々氣遣ひめさるまじく候、心安う思ひ給ふべく候、そもじ兼兼の合點の程もぞんじ候故たとへ萬一いか樣の難義かゝり來り候とても、見苦しきやうには有るまじく候、又何事もなき世の中にては、猶もつていかやうとも渡世めさるべき心のはたらき、おはしますと覺候ゆゑ、中々心易くぞんじ候、今更思ひ殘す事もな

くて、心よく打立候まゝ、そこもとにてもせめての本望と思ひ給へかしにて候。此度の事我身ひとりにはあらずとも、何やうに珍しきわざにて成果る者に添ひて、うきを見給ふ事、いつの世の悪縁かとそれもふにかひもなく、是非に及ぬ因果の程たがひに思ひあきらめの外なく候、爰元の埒明たるとの便り候はゞ、一番に玄溪より知らせ可申候世の沙汰も聞きつくろひて、此程も申入候ごとくの心得をよく／＼めさるべく候、……………時節も近づきあたりも漸々に仕度の申合せなどとて、人多く此文も夜明に二階へのぼりて、漸々書候故何方へも文遣はし不申候、……………荷物も一兩日中に下し可申候、夫にも文の成り次第にては詠歌たんざく遣し可申候、見て給へかしにて候。はや／＼人々わやつき筆を留まゐらせ候、跡の事頼み入りまゐらせ候

などあるには良人の心如何ばかり忠義にねり固め給へるとはいへ、六十にあまれる老体のかくいたづき給へる中にも、かにかくに拙き我が身のことまでもそれもはせ奉らむこと、あな心苦しとばかり氣丈の丹女もこらへかねて泣きふしやけむ。

あはれ心は玉の如く、情は花の如き良人にむかひて、如何に其の妻の心は其をやどせる水のごとくなりけむ、如何に其の妻の情は其を寫せる鏡の如くなりけむ、とゆかしく良人につかはしけむ文言葉の如何に重内の心をはげましもし、慰めもしたりけむと、なつかしくればねて、そのかみをそれもひやれた涙もとゞめあへず。

　　筵のあと見るにつけても時雨きて
　　　いひかへすべき言の葉ぞなき

とは良人につかはしたる返事の末にかきそへたる一首なりとぞ。げに深き心をふくませたる良人の筆の跡を見ては、時雨のみふり懸りきて、いふべきことぞかず

〳〵ありながらも、れもふやうにはねいはれざりけむ。いはむとしてもいふべきことの葉をれもひ得ざりけむ。其のいはむとしても、えいはざりしことのいかに重内の心を感ぜしめたりけむ。其のね言はざりし所は中々に千萬言をくり返すよりも、勝りたりけむ。

あはれこの義女節婦。けふあすと待ち暮したるに良人を始め義士の面々、復讐の首尾も見事に遂げて、散りしける雪よりも先に、世を辭したりときゝて、世に嬉しくも、かなしくもればね て、今は全く思ふこともあらじと、一首の辭世を殘して、其の身は良人と其の子とを追ひて永く眠りしとぞ。心あるものは行きて昔を吊ひ給へ。情あるものはとひて哀をくみ給へ。其の奥城は苔蒸したれど今も殘りて京都本國寺の側にありときけど、

夫や子の待つらむものを紆かまし
なにか此の世に思ひれくべき

此の外にも丹女のをり〳〵ことに詠みいでたるを擧ぐれど、

なき人の墓に參て
きのふまでとへど答へし言の葉に
きゝころかふれ松のしたかせ

春風
咲きそろむる外山のさくら香ひきて
人れどろかすはるのあさかせ

稻瀨にて
くれて行くあきといはせの山風に
もみぢかつちる音のさびしさ

など何れも哀れに心ふかゝらぬはあらじ。あはれ實も花もかぐはしき丹女の心。其の香ひは限りなく、深けれど拙き筆はすぢも亂れて、其の面影の片はしだに之寫さず。見む人其の書きざまのしだらなきを咎め給はで、いはぬ所に深き意のあるよしを知りて給はらむ嬉しうなむ。



活花（十一）

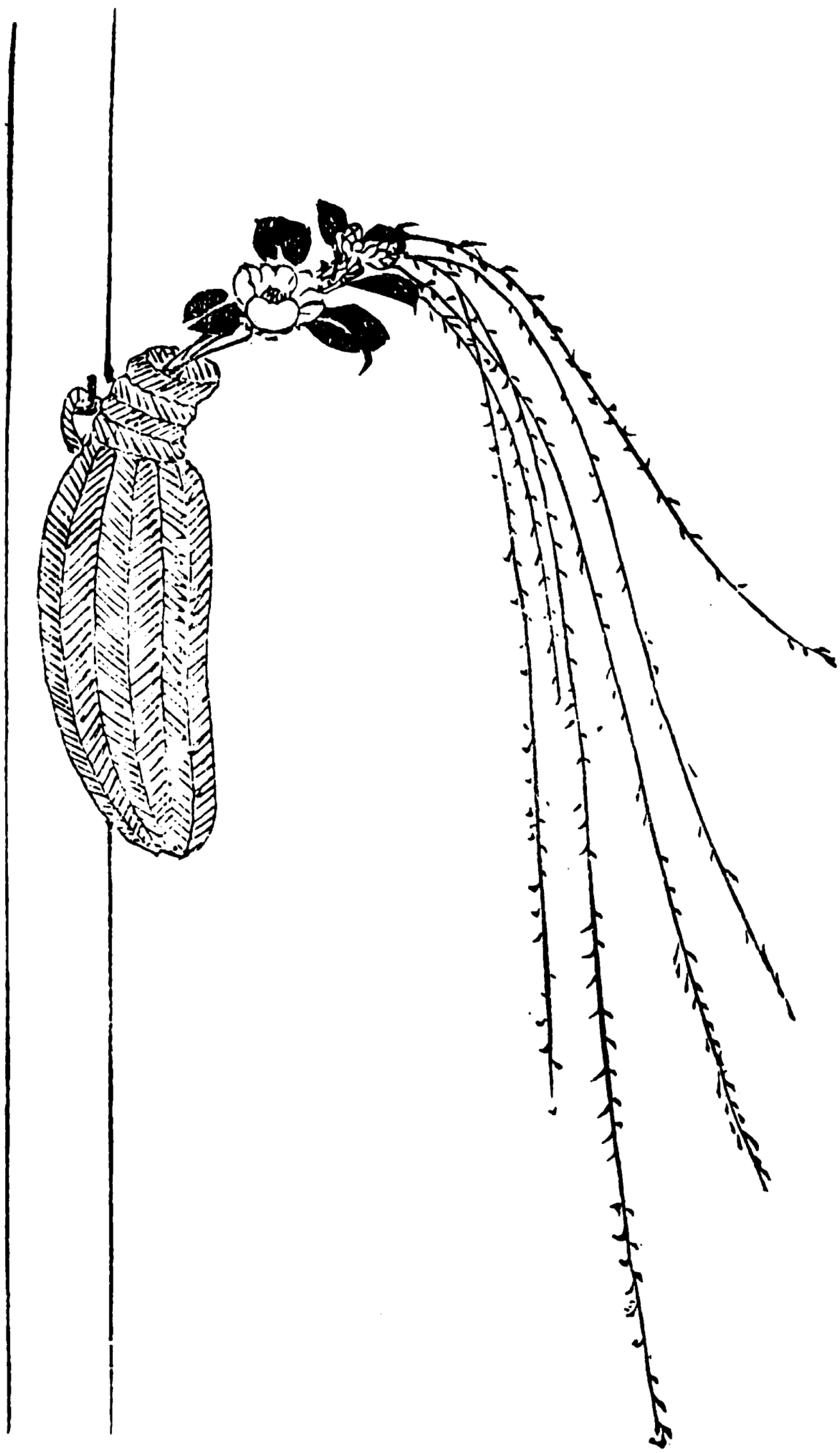
田邊和氣子



花てふ花の兄なりと、昔よりいひもて來にける梅なれど、すゝみ行世にれくれじと、まだ冬深き軒むなる、東の方は一枝二枝、苔のふくだみたるぞ、めづらしくも又うれしかりける。此方の垣ねのもとには、寒菊の花の匂ひうづたかくなりて、葉のみ霜に色付たるぞ、一とせの花の弟ともいふべからむ。されむ此度の活花には、先づ此梅を眞副として、あたらしき年を待とり、下にはくれ行年を惜みて、顏なる、寒菊を添なむ、花の兄弟一瓶の中にありて、待と惜むと、うらうへなるこゝろぐに、いかなる事をかいふらむと、れもふもいとをかし。ろも梅は其木

質もろきものなれど、折れ／＼にならざるやう心用ゐころせちなれ。されどよき枝ぶりを見たてゝ眞副を定め、あしらひの枝はよき程に加ふべし。立枝　都合によりて用ゐざる事もあるなり。根〆の菊は五本どかり恰好よく添てよし。菊の葉は水際より一寸余り迄は付ざるをよしとす。花斗多く重りたるは風情なし。畫がく心にて見斗ひ給へや。

奥ふかき茶室には、れこたりのつもり／＼しすゝ拂終りて、床なる懸物も、あら玉の寶珠を畫がける横物に替へ、柱に懸たる花籠には。しるも知らぬも、したり柳に玉つむきの八千代をむすびて活たるころ、又見どころあるものなりけれ。



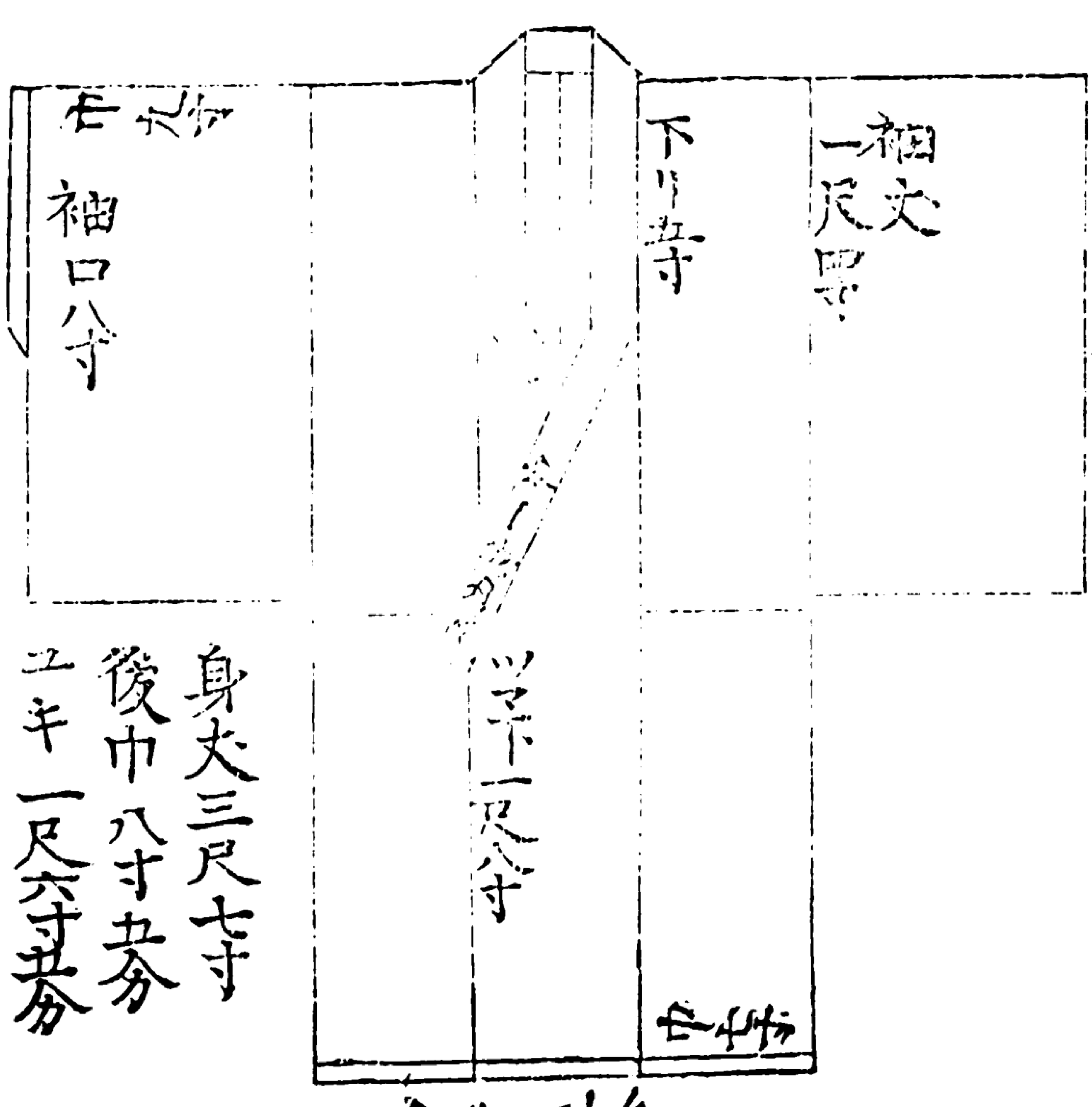
たちぬひ

西山たい子

(十八) 男物綿入れの縫ひ方

袷も、綿入れも、大方女物と同じなり。先づ四袖を縫ひおきて、背をぬひ、單物の縫ひ方に説きし如くにして、腰上げをなし、兩脇をぬひ、袵をつけ、襟をつけ、それより、裏の身衣をとりて、表の丈けに合せ、ふきだけを出して、長きだけを肩にてあげ、背、脇、袵をぬひ、裾を合せ、四袖をつけ、例の如くにうらがへして疊み、例の如くにして綿を入れ、ひきかへして袵の縫ひめを中よりうら表とぢ、つま下をくけ、襟をくけ、袖口をくけ、のとぢ褄とぢをなすなり。裏襟をつくるには、表の如く裏の身衣に縫ひつけおきて、くけるときには諸共にたゝみて棒襟にくけるなり。

(男物縫上りの圖)

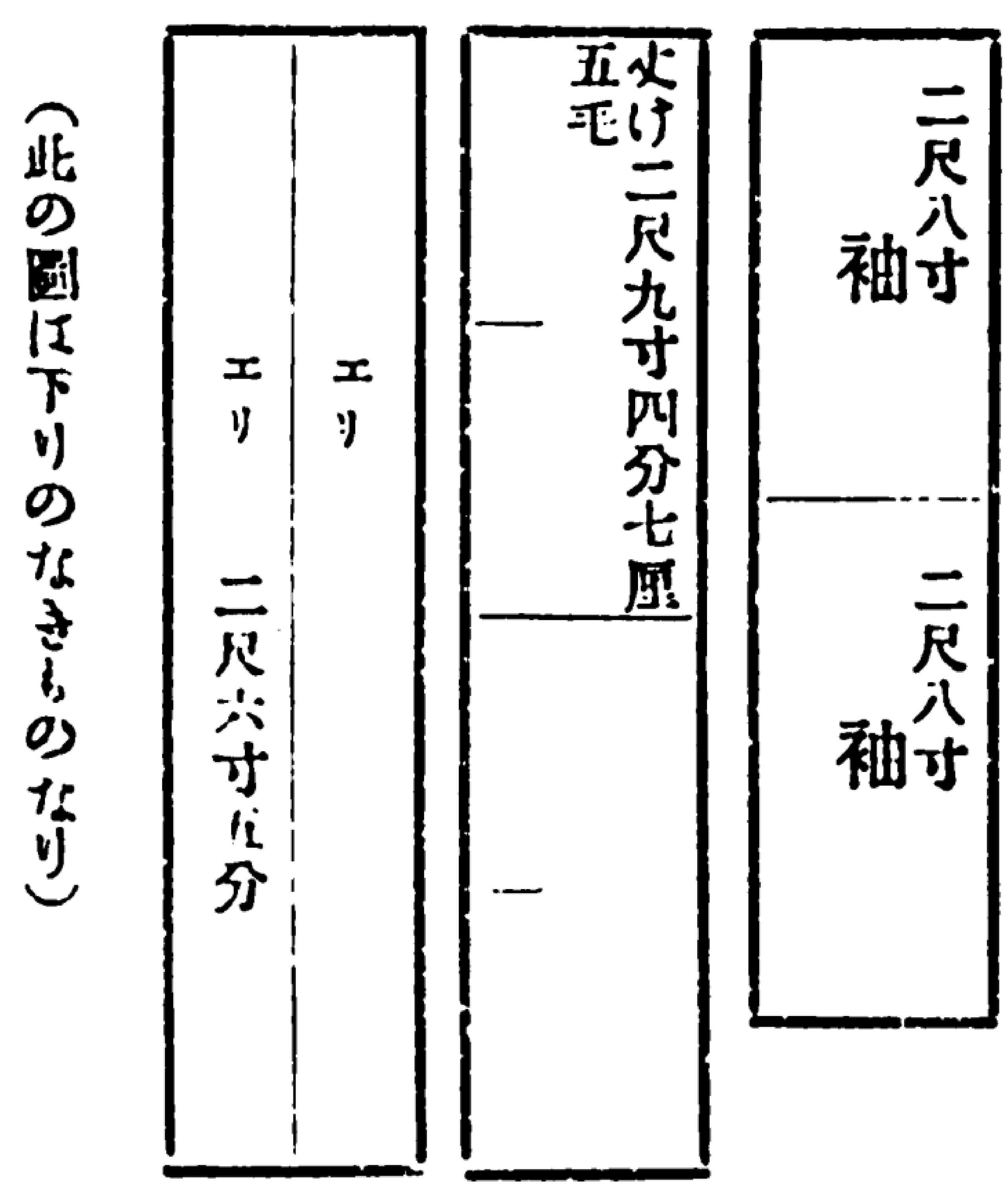


(十九) 半纏の裁ち方

半纏は二丈ばかりにて出來るなり。まづ袖をとり去り、襟をとり、其殘りを二つに切り、襟肩を明けて、身衣とするなり。襟をとるには、まづ身衣の縫ひ上りを何ほどになさんと云ふ事を定めて、二尺三寸ぐらゐと思

はゞ、それにえりかた二寸五分及び縫こみ一寸ばかりを加へ、二尺六寸五分ばかりをはかりて切りとり、それを縦に眞二つに切りて、眞中にてはぎ合せて、襟となすべし。寸尺等は圖にしるし置きたれど、袖丈も身丈も、その人の年齢及び好みに應じてたつべし。襟丈も身衣の縫ひ上りの丈けに應じて、よくつもりてたつべし。又前下りを成さんと思はゞ、襟かたを明くるときに、前の方を少し長くなしおき、襟もまた下りだけを長くたつべし。よく圖を見合すべし。

(半纏裁方の圖)



(此の圖は下りのなきものなり)

胴着も襦袢も、この半纏と裁ち方は同じなり。只袖丈け身丈等を短かくたつなり。襦袢などは一丈七尺五寸ばかりあれば、出來るなり。

だいどころ

重詰

今年も早や暮れになりて、餘日多からずなりたれば、來ん年の始の準備には、重詰の調理、何づ方にも必要なるべし。今その二三種を記して、臺所の參考に供へまゐらせん。

甲。照りごまめ、栗の甘煮、香茸、慈姑、牛房の五品を種とす。さてその料理法を記るさんに、照りごまめは先づ「ごまめ」を炮烙にて暖ため、其軟かになりたるとき、二に割き、味醂に醬油少量を加へたるものを、

煮詰めたる汁に、前の「ごまめ」を投じ、之を攪き回はして、てらすなり。栗の甘煮は勝栗を好く洗ひ、軟らくなるまで湯で、扨て砂糖の「アク」を拔きたる汁に、食鹽少量を加へて、之を煮るなり。香蕈は之を湯で、其固き處を取り去りて、縦に割き之を味淋と醤油にて鹽梅して煮るなり。慈姑は丸の儘湯でゝ、皮を剝き、味淋と醤油にて鹽梅し、煮るなり。但し詰むるときは、三又は四位に好き形に切るべし。牛房は二三分程に輪切となし、湯でゝその軟になりたるとき、味淋と醤油にて調味し煮るなり。

乙、芝海老、銀査、結昆布、蓮根の白煮、黒豆、芝海老は、先づザット湯でゝ頭を取り、味淋と醤油に鹽梅し、煮るなり。銀査は、炮烙にて炒り、皮を去り、湯でゝ後食鹽にて味を付け煮るなり、板昆布を水に漬け置き、好く洗ひて湯で、その軟らかになりたるとき、巾五分長さ二寸位に切りし之を結び味淋、醤油にて好く煮たるものを、結び昆布と云ふ。白煮蓮根は、蓮根の皮を剝き、薄く切り、味淋と食鹽に鹽梅し、煮るなり。黒豆はよく湯でゝ、味淋醤油にて煮るなり。

右の品々は思付きたるまゝ取り合せて、記したるまでなれど、甲乙の品を互に入れ換へ、又は左の如き品々を用ふるもよし。但し色取りの配合を考へて、取捨すべし。扨て其の品々には、

金柑の甘煮、金柑の皮を針にてブツ〳〵孔をあけ、湯でゝ「アク」拔きの砂糖と食鹽にて、味を付け煮るなり。但し湯でるときは、度々湯を取換て、酸味を去るべし。

百合の白煮、百合の鱗根を、一片宛に剝し、その黒部分を去り、ザット湯でゝ、砂糖と食鹽にて、鹽梅し汁を澤山にして、崩れざる様に煮るなり。

結干瓢干、干瓢を五本程宛揃へ、一寸五分位に間を置きて結び、水に漬け、暫時を經て、之を洗ひ、結び目を隔て切り、煮出にて暫らく煮その軟らかになりたる

とき、味醂と醬油にて味を附くるなり。

乾わかさぎ、煮方は「照りごまめ」に同じ。

右重詰の外に、一月に用ふる品々の調理方一二を記さんに、

鮒の昆布卷

先づ、昆布を水に漬け置き、扨て鮒の極く小ものを燒き、前の昆布を水より出して、巾二寸位、縦二寸位に切り、之にて鮒を捲き、干瓢にて結び、鍋の底に輪切の大根を敷き、その上に昆布卷を重ね置き、三四時程、湯煮をなし、その軟になりたるを待ち、味醂と醬油にて鹽梅し、更らに一時間程煮るなり。

葉山葵の酸漬

葉山葵の莖と葉を好き程に切り、熱湯を注ぎ、後ち乾かし置き、酢と醬油に味醂少量にて味を調へたる汁に之を漬け、一日程經て用ふるなり。

このころ

鋤柄義子

かころうは、このせつはえて、明年げしのころかるゝなり。

さわしか、かもしゝともいふ、鹿のたぐひなり。このころ角おちて、こん春になりて生へかはるなり。

垣根などこのごろ結ひなほしたまふべし。

下もえとて寒國にては、雪ふかくつもれども麥などはその下にはやくももえそむるなり。

大祓は、こん晦日、かしこきわたりをはじめて、祓の式をおこなはせたまふ。こはいとあかれる代よりつたへこし式なれど、おのも〳〵最寄の産土の社にまうでゝ、はらへしたまふべきなり。



わが學園

(三) 祝詞

鹽井正男

前に申すべきを取り遺したれど、此處に申し上げんは、祝詞を見たまはむに就きての書物の事なり。さきに申せし如く、延喜式の第八卷目に載せられたれど、それは令孃たちの見たまはむに、たよりよき書ならず。講義したるものは、さまざまあるべけれど、まづ加茂眞淵翁が著はしたまへる祝詞考といふ書三冊あるがよからむ。本居宣長翁のものしたまへる大祓詞後釋といふ書二冊あり、これは大祓の詞に就きての講釋ものにて、その詞を知りたまはむには、至極たよりよからむ。又藤井高尙ぬしの作りたまへる大祓詞後々釋といへる書もあり、これは本居翁の說を補はれしものなり。是非大祓詞後釋と合せて見たまふべき書なり。其他には、敷田年治大人の辨じたまへる祝詞辨蒙と稱する書など、なほ他にもあなれど、さまでいはむも要なし。近き頃水穗會と稱する會より、學階試驗科目全書の第二卷として、春山賴母といふ人の述べられし訂正祝詞式講義と稱する書あり、簡略にして、大要を知らむには、至極たよりよからむと思ふ。それらにてまづ讀みわきまへたまへ。

さて、今延喜式に載せられて、世に傳はりたる所の祝詞なるものは、何時頃に如何なる人の作りたるものなるかといふに、前にもいへる如く、もとより知るによしなし。唯これを想像推察するに過ぎず。故に人々說く所同じからず、或は神代の古へより、遠く傳はれるものもありといひ。或は全く後世の作なりといふもあり。或は同じ祝詞の中にも、古き所と新しき所と相混

せりともいひ、定まりたる說あらず。たゞ其の時代の同じからざる事のみは、先輩の說や、一致せる如し。而して、其の中にて、いづれの祝詞が最舊く、いづれが次に、いづれが最新しきものなるかといふに至りては、また先輩の學者、各其の意見を異にして相一致せず。加茂の眞淵翁は、祝詞考の序に、祝詞の作られたる時代の順序を論じて曰く、第一に出雲の國造が神賀の詞は最舊く、これは飛鳥の岡本の宮の御代（舒明天皇さまの時御也）ぞかりに作られしものならむ、詞まさしくしてみやび心巧みにしてゆたかなり、巧みのこまやけきはいと後のよなれど、しらべのゆたかなるぞ、上つ代の殘れるなりといはれたり。此の出雲の國造の神賀の詞とは、則ち出雲の國造が新に任せられたる時は、朝廷にてこれが新任式を行はせたまふ、さて新任の式すむ時は、其の人は歸國して、齋ひ愼みて出雲の神々を祭る事一年にして、また都に上りて、神賀を獻り、さて此の詞を奏聞するなり。それより歸國して、また更に齋ひ愼みて神々を祭り、更に都に上りて、また此の詞を奏聞するなれど、併せて二回の奏聞を爲すなり。賀詞とは、則ち、御代を祝ぎ賀ふ詞といふ意なり。此の事の初めて歷史に見ゑたるは、元正天皇の靈龜と申し奉る御代の二年の二月といふ條りなり。

眞淵翁又曰く、第二には、六月と十二月との大祓の祝詞なり。これは大津淸御原の御代ごろの詞なり、言葉おもしろく雄々しく、心巧みにして整へることのみ、ゆたかならず。つとめて古をうつせるあとあり。其の意と詞とは、上つ代のまゝともいふべけれども、つらね書きしは藤原の宮の頃の躰なり。それが上に、親王諸王と書きしをも見よ。皇子を親王といひ、二世より王と書きて大きみといふも、かの頃よりのことにて、古はあらずといはれたり。而して、翁は大祓の

詞の所に論じて曰く、大祓詞は近江の大津の宮の末より清見原の宮の頃までの間に書きつらねたるものならむ事は、前にいへるごとし。然るにこれを神代の事として、天の岩戸の前にて天兒屋根命の唱へ玉ひし神ごと〻いひ、又檍原の宮の御代に、天種子命の作れりといふなどは、古言古文の時代のさまあることをもわかずしていふろら言なりと論難せられたり。此の大祓といふ神事は、前にも一寸いへる如く、伊邪那岐神の御事を素戔嗚尊の御事とによりて、起れるものなりといふ事は、定説となれる如し。誠にしからむ。大祓といふ語の、初めて正史に見えたるは、仲哀天皇の御卷に

天皇既崩訖、爾驚懼而坐殯宮、更取國之大奴佐、而種々求　生剝逆剝畦離溝埋屎戸上通婚下通婚馬婚牛婚鷄婚犬婚之罪類、爲國之大祓　云々。

といふ文あり。これが初めて正史に見えたるものなり。

後に天武天皇の御卷に

五年八月　詔　曰、四方爲二解除一、用物則國別國造輸祓柱馬匹、布一常、以外郡司　各　刀一口、鹿皮一張、钁一口、每戸麻一條、云々。

また同紀十年七月六日の條に、

令天下悉大解除

及び同紀朱鳥元年七月の條りにも同樣なる語あり。もとは六月十二月といふやうに、其の日を定めたるに非ず、天下に災疫の非常なる難義ある時に、思ひ立ちて、時々行はれたるものなりけむ、故に七月の事あり八月の事あり、これを行ふ日一定せざりしなり。然るを太寶の令出るに至りて、六月と十二月との晦日の大祓の事を令條にあげ、一月より六月までの罪業を、六月の晦日に秡ひ、七月より十二月までの罪業を、十二月の晦日に秡ふやう定められたり。

眞淵翁又曰く、次には祟神を遷却る詞、及び大殿祭の詞にて、これは藤原の宮の末につくれるならむ今一きざみ劣りにたり。其の次ぎには、祈年廣瀬立田の祭の詞は奈良の宮の始つころ作られしものならむ、おなじ古言もてすれど、文てふものを心に得ていひなせしならねど、また一きざみ劣りにたり。其かつぎ〳〵の詞は、いやくだちにくだち、まよわらに弱らひつゝ、更にあげつらふべくもあらずといはれたり。

本居宣長翁は、大秡詞後釋に、これを難じて曰く、つら〳〵考ふるに、祝詞式に出でたるもろ〳〵の祝詞ども文、おの〳〵まさりおとり見ゑて、誠にふるきと後なるとのけぢめあり。そが中に出雲の神賀の詞とこの大秡のとを、ふるしといはれたるなども、誠にさることゝ見ゑて、此大人にあらずむ、誰かはかゝる古文のさるけぢめをむ、能く見わかむと、いとたふとくぞおぼゆる。然れども是はかれよりおこれり、それはこれより後なりなど、一つごとに品を定めていはれたるは信けられず。すべて古の事、さばかり細にけぢめ見ゑ分るゝ物には非ず。（中略）そも〳〵諸々の古き祝詞のたぐひ、其始めを、つら〳〵思ふに、まづいと上代には、それとつゞまりたきて定めたるはあるべからず、たゞ其時にのぞみて、其事の趣きをもて、そを申す人のいかにも〳〵よろしきさまにぞ申しつらめ。然るを年々定まれる事などは、その年々の趣おなじければ、自ら定まれるやうに成り來にけむ。さてそれを書記しおきて、年々用ることは、何時の頃より始まりけむ、それも定かに知りがたき事なり。されどもろ〳〵の祭の中のふるき祝詞は、大かたいと上代より申しならへるまゝにて、いと〳〵ふるきを、そのつゞりざまいひざまなど、いさゝかづゝ世々に移り變り來ぬることも自らありと見ゑ、又後に加はりもし省か

りもしたることなども少しづゝまじれるもありと見ゑたり。かくありて、全く令式にのれる如く定まりたるは、大寶令の頃ならむか、はたそれよりやゝ前つ方天智文武の御代のほどより定まれるもありやしけむ、それはたしかにはいひがたし。又後に始まれる祭の又祭は舊けれど、その祝詞は古のはうせたるにや、やゝ後に作れりと見ゆるなど、作りざまは拙くとゝのはぬこともあるも、猶ふかき他例にならひたる舊き詞はまじれり。かゝれど、すべて舊き祝詞は、漢國人のよゝの文章、又こゝのも後の物語序文などの論ひいふごとくに、其の代に其の人の作れりなどは、いふべきものに非ず。その大かたは、上代よりつぎ〳〵、例によりて申しならへる詞によりて、つゞれる物なれどなり。されど此の大秡の詞も、大かた上代の詞どもにて、中には皇御孫の命の天降り坐し御代のほどより傳はりけむまゝとおぼしき所も多く見ゆ、又げに大津淨見原藤原などの頃よりにや加はりけむと見ゆる詞もまじれるなり。されどその後の詞のまれにまじれるをとらへて、すべてを其の代に作れりとせむは、いとあたらぬさだめにぞありける。

とやうにいはれたり。それもかつ〳〵說なきにあらねどあまりに長ければこゝにて今回は筆をおく。

（未完）

しかりとて
身にしつもらぬ
ものならは
くるともとしは
なけかさらまし

（水屋）

漫録

親のめぐみ

故人 仲丈敬甫

孝と云ひ、不孝といふは、親のめぐみをよく知ると、知らざるとなり。孝は妻子におとろふと、曾子のいへる事、世の常のいましめならし。孝あるものは、子を持てこそ、いとしも親の情はふかき事としるべけれ。人、子を思ふばかり、おやを思はゞ、不孝になるゝ物はあらじな。古歌にも、この心おほかり。

人の子のおやになりてぞわが親の
　思ひはいとゞおもひしらるゝ

この歌は、康資王の母のよめるなり。

たらちねの親の暗ぢを知るものは
　子を思ふ時のなみだなりけり

人の親のこゝろは暗にあらねども
　子を思ふみちにまよひぬる哉

おもひやれ子を思ふ鶴の一つがひ
　おなじねになく夜のこゝろを

たらちねの親の守りとあひそふる
　こゝろばかりはせきな止めそ

このうたは、小野のちふるといふ人、みちの國へゆきける時、その母のよめるなり。

孔子ののたまはく、父母の年をば知らずば有るべからず。ひとつには以てよろこび、ひとつには以ておそると。まことに父母のよはひの數は、常に心にこめて忘れず。かつはこの命長くておはしますことをよろこび、かつはこの末ちかゝらむことをおそれて、世にます時に、孝養怠りなかるべし。樹靜ならむと欲しても風し

づまらず。子やしなはむと欲しても、親いまさずといふは、曾子の歎なり。得て久しうすべからざるものは、親につかふるをいふなり。孝子は日をしむと云ふは、楊子がいましめなり。我限りある命の内に、をさなきなど丶、やみぬる時とは、おやにつかふる事もなし。老いぬるのちは、親すでに居まさず。しかれど、おやの身にそひ奉ること、いくほどもなき間なれど、日を惜みて、孝養すべき事なり。怠りがちに打すぎて後、八千度悔るとも、さらにそのかひなかるべし。古歌どもの中に、

おのづからおくれ先だつ友あれど
　おいてとゞまる數ぞすくなき

ちらねどもかねてぞ惜き紅葉ゞは
　今はすかりのいろとみつれど

たらちねの有し其世にあはれなど
　思ふぞかりはつかへざりけむ

をしへ置くその言の葉をみる度に
　またとふ人のなきぞかなしき

三　婦人狼をうちしこと　　松竹庵主人

左の一節は、往昔天保の頃、めづらかなる事ども集めしるせる、記錄の中に見えたるものなれど、一人讀むも惜しとて抄出でつ。

私支配所
飛騨國大野郡宮村
百姓彦助母
よ　り　巳七十三歲
同人妻
は　ち　巳四十八歲

同人　娘

よ　ね

巳二十三歳

右之者共、狼を仕留候段、風聞御座候に付、支配所、飛騨國、高山陣屋へ、右之者共、呼出、始末相糺候處、彦助義、無高にて、農業の間、杣木挽等之渡世仕、家内四人暮候て、去辰十二月中、他國へ稼に、罷越留守中、當正月十二日、夜四半時頃、彦助母より儀、當年六歳に相成候孫を召連居宅裏口より、四五間程も離居候、雪隠へ參り候處、狼一疋何方よりか、駈來り、右孫へ飛可懸体に付、より儀驚き孫を搆ひ、側に有合候薪にて、狼を敲き候處、右狼振返りよりの左の腕へ喰付候を、振放し、猶又薪にて敲き、可追拂と存候處、可喰体にて前後左右へ飛廻り候に付、種々相防候へ共、極老之儀に付、氣力も疲れ、三ヶ所程手を負候處、彦助妻、はち娘よね、右物音に驚き一同裏口へ立出候處、右の次第にて老母危相見候に付、兩人共驚き駈付候處、狼右兩人を見付、よりを捨置、はちに飛懸り、肩へ喰付、猶又よねへ飛掛り候に付、よね義祖母幷に母に怪我無之樣にと存、其身は一向に不相厭、狼に組付仰向に押倒し、咽を〆付居候內、はち儀、臺所に有之候、山鉈を取來り、狼の天窓を散々に、切碎仕留候義にて、よね義所々疵請候へ共、淺疵にて、老母幷はち、疵處も格別の儀には無御座、三人共追々平癒致し、小兒は老母の働にて少も怪我無之旨申候に付、猶又村役人共、相糺候處、村役人共は、餘程住居も隔り罷在、翌朝右之趣及承候に付、早速罷越仕留候、狼等見請、始末承り候義にて、三人の者共、申立候通、相違無御座候處、右はち、よね共、平日老母へ孝養相盡し、家內睦敷、相暮候義にて、畢竟老母を大切に存居、右体危急の場合に臨、必死に相成相防候義に付、女子の働にて、猛獸をも仕留候義と相見候段、村

役人共申聞候に付、近村の風聞等相糺候處、右申立の趣、無相違、村役人共、申立候通、右はち、よね義、平日とも、老母へ孝行致し候心底より、其身を不厭、相防、老母を救ひ、其上狼を仕留、村内は勿論、近村迄害を除き、母義も極老の身にて、最初は手強相支候に付、小児にも怪我等無之三人共、女子之働には、稀成義に御座候間、可相成儀に御座候はゞ、三人共、相應の御褒美被下置候樣、仕度、奉存候、此段奉願上候　已上

天保四巳三月　　大井帯刀

同年九月幕府より賞賜

生涯二人扶持被下　より

銀拾枚づゝ　はち よね

右之通御褒美被下候

おきの玉藻（二）

永石薫風

静女の造れりといふ石燈籠のこと

この一編は、好古叢誌第二卷、静女の墓の、次に出たれど、はやく前號にかゝぐべかりしを、もらしつれど今こゝにかゝげつ。松浦詮翁のものせられしものなり。

静女の墓どころの事ども、かつかつ記されたる因みに、おぼろげなる事ながら、おのれも一言いはまほしき事のあるは、我住居する淺草向柳原町の邸内の、北の方に、いと古くより静女が造らせてすゑ置しと云傳へたる一基の石燈籠のある事これなり。此類の燈籠、江戸のうちに今一基ありて、或商家の持地のうちに遺り傳はれるが、形もおほかたは同じといへり。そが家に語り傳へたるやう、昔静女懐妊して、鎌倉にありし時、男子出生せば、其身危ふかりなむを洩りきゝて、

いたく懷き、鎌倉の若宮八幡宮に祈願して、十二の燈籠を造りて供じたることあり。こは其燈籠の一なりと云へりとぞ、我邸内の此燈籠のあるあたりは、當初陸奥へ通ふ道路なりし由にて、俗に一里塚と稱ふるものありて、其處に生たる古き榎の木の、朽殘れるもあれど、こも鎌倉より陸奥へこころざせる道すがらに、妖の君の恙なからむことを、神に祈りなどせし折、此物造らせて、すゑ置けるにやあらむ。或商家に傳ふる如く、若宮八幡宮に供せしものならば、鎌倉のうちにこそ遺るべけれ、遠く距れる此江戸にあるは、いと訝かしともいふらめど、其鎌倉にありし程は、囚れの身なれど、心のまゝにさる事成遂べくも覺えねど、彼地には無くて、却て外にあること理にはかなへるなれ。又上に云えつる墓所のある伊阪村の本郷寶侍戸といへるは、寶子戸とも、寶珠堂とも、文字はさまざまにかけれど、當初靜女の建たる寶篋印塔のありし故に、寶持塔と地名にも呼べるにて、其塔も後々まで遺り傳はりて在りしに、何れの時の洪水のをりにか、土に埋れて失つとは、其地の古老の物語にも聞けど、陸奥へ下る道々にて、さる事せしは疑ひなくなむ。我かたに遺れるは、屋敷地に賜はれる以前よりありて、只しか云傳ふるのみ。確なる證とては無れど、其形の後の世のものと異なるのみかは、古びたるさまも疑ひなき其世の物と思はるゝよしは、好古の輩の皆いひはやせるものにて、既く我庭の事ども、橘守部の記せる蓬萊園の記、（此書二卷ありて近く板にゑらせたり）といふものにも載せてあり。其文に曰、ゆるさぬ門、この門は金綺樓の南おもての門なり。此門のうちに壺庭ありて、壺の内にかたちめなれぬ石のほぐらあり。そのほぐら形よりはとき代ふるく見え、とき代よりは故よし珍らしう承はりぬ。さるは昔もむぢの比、靜と聞えしたをやめの、さるやうありて、神にたむけ奉れりし石の、殘り傳はりたるなり、

とぞ。げに打見るより只ならず。實にさぞあらむと覺ゆれど、いとゞたふとくなづかし。遠き稀らなるみさを人にて、其昔を思ひやれどあはれなる事多し。

とかたみとて遺れる石のともし火に
あかき心をかゝげてぞ見る

云云と、記せるがこも好古の一端なるべしとて、形をさへ寫させて、添ふることゝはなしぬ。（高さ六尺四寸三分竿石の四方に梵の如き形と梵字四字づゝあれど能は見わからず）本書には塔の圖あれども、こゝにはもらしつ。

✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿

塞翁が馬

塞翁がむまのたとへは得といへるうちに失ふ事あり、失といへるうちに得ることあれど、得るもよろこびとするにたらず。失ふもうれひとするにたらざる事をいへり。よしあしといへるもろもろにひとしく秦の長城を築けるは、惡政の第一なれど、萬世のふせぎとなれるを見れど、あしきうちによき事あり。參耆はどなる良藥はなけれど、補ふまじき病を補ひ、人のいのちをあやまるは、よきうちにあしき事あるなり。忠といひ孝といへるはど、たふとき徳なけれど、鬭拳が兵をもていさめ、郭巨が子をうづめんとせしは、忠孝のうちにあしき事あるなり。ものごとかくとしりて、よくいましめ、つゝしむは、ひじりのをしへ、ものごとかくとしりて、なりしだいにするは、道家のをしへなるべし。（たはれぐさ第二卷）

申の歳



壚井ふく子

年頃つかひならしたる下女の母來りて、娘のいとまたまはれといふに、いとをしけれど、何時までも家にとゞめ置くべきにあらず、いとま求むるは、嫁入りさするにやといへど、御詞のごとく嫁に遣はすなり、不束

なる娘を、年久しく御情かけてめし仕ひたまひたる御恩は、言葉に盡くすべくもあらず、かゝる御家につかへて、身をみがゝむは、娘にとりて此上なき仕合にはべれど、明年は申の歳にて、緣儀わるけれど、今年の内にとて取り急ぎぬといふ。そはめでたき事や善は急げといふ諺もあり。明日とは云はず、いざ今日にても連れ歸られよ、行く先きも田舎にやなど、わが母なる人の尋ねられしに、左樣に侍り、同じ邑にて、疾くより話しありたれど、あまり好ましからぬ家故、心すゝまでありしかど、明年は申のとしなれど、今年のうちにとおもふに、外に宜しき方もあらねばなどいふに、おのれはいたく驚きぬ。かく思ひなしつゝ、娘やらんは申の年よりもわろからんとひそかに思へど、詞に出でんはさすがにてやみぬ。此の下女、常にさるといふことをいみて、申の日を得ての日と云ひ、猿のことを、得て〳〵と呼び、また鼹のことを、わたりめなどいひ居りしが、をかしや、壽留女は結納などに必ずつかふものにて、目出度なされてありしものを、するめと云ひて、耗るものならば、婚姻したるものは皆耗らずばならざらむにと、笑ひし事もありけり。この女も、またその母の迷信をうけつたへたるにや。されど敎育なき田舎の女のことなれば、强て咎むべくもあらねど、花の都のさるべき家などにも、なほかゝる迷信をいだくものあるこそなげかはしけれ。明治二十九年は申の年なり、申は去るに通ひて、離別の儀なり。めでたからずとて、今年の中に婚姻せむといそぐもの多く、まだ年齒も行かぬ娘の、家政の事などおぼつかなきに、申の年をいみて、今年のうちにとつがせむとするもの多きは何事ぞや。また人によりては、今日は寅の日なれば、めで度ことを行ふ日にあらじ、寅は千里行きて千里かへるものなればなり。八の日もわろし、七の日九の日もまたわろし。一日、十五日には、洗濯

すべからず、洗濯すれど愛敬を失ふなり。四め十めの夫婦になるべからず。始めよけれど、後かならずわろし。牛の日には仕事など成し始むべからず、牛の歩みて似に、長くなれどなり。午の日には髪を洗ふべからず、辰の日には爪を取るべからず、辰は龍にて、爪なくては叶ふべからざれどなりなど、いふ人の多けれど、皆ことわりなきひがごとぞかし。さる事をいひ居らど、酉の日ならねど、ときをもつくらず。ねの日ならねど、寝ることも出來ざらむ。牛の日に仕事なしはじめたりとて、心だにこめて勉みなど、明日まで延どさむよりは早く出來べく、一日十五日に、洗濯するをいとふよりは、已れに愛敬の心を失はぬやうなしたらむがよく。午の日に髪わらひても、心を靜めたらど何かわらむ。又四めは夜目、十めは遠目とて、夜はわろきものゝよく見ゑ、遠くにて見てよきものも、近くなるに從ひて惡しく見ゆるもの故、さる事を、云ひ出でしものなるべけれど、すべて馴るゝよりわろくなるものなれど、四め十めならずとも、馴れ過ぎて禮を失ひなば、何れにてもわろからむ。また申の年に行かぬものとて、去るもあれど、去らるゝもあり、覆水盆に返らざる例へになりたる大公望の妻も、申の年にがしづきしと云ふ事を聞かず。事は名よりも行ひにあり、年月をゑらむよりは、已れの品行をつゝしみたらんころ長久繁榮のもとならめ。むかし或家の夫は福太郎、妻は壽と呼ふものありけるが、その妻は美人の聞ゑ高かりけれど、妬心ふかくして、夫の放埒なるを憤りつゝ、常に爭論絶ゑざりしが、あるとき其女妬のあまり、夫の留守に縊れ死し、夫もまた大酒のために、吐血して身まかりぬとかや。名は如何にめでたしとも、何かはせむ、松竹に千とせを祝ひ、鶴龜によろづよを比へむよりは、よく〳〵人の道をうなへたるものを夫にゑらび、婦徳をやぶらざるやう、始終心にかけたらんに

は、申の年とてなどかいまはしき事あらむ。家を治むるは和合に、長生は養生にありと知らずや。

筆のすさび　　たけを

○花　紅葉

雲と見え雪とまがひて、咲きにほふ花のさかりは何にかたとへむ』。野に山に赤地青地の錦おりかくる秋の紅葉はた似るものなし。朝日ににほふ山櫻も言の葉に盡しがたけれど、緑の木の間にさし出でたる紅葉の夕日に照りまさりたる、はた筆にもうつしがたしや。春秋のあらそひ、花紅葉のまさりおとりは、昔よりさだめあへる事なれど、猶其のよしあしはいづれともさだめがたかるべし。處により見る人によりては一方に心もひかるべけれど猶、

春秋におもひみだれて‖わきかねつ
時につけつゝ‖うつるこゝろは

と云ひしぞなべての人のまごゝろなるべし。

田舎の冬げしき　　山田のおくて

田舎のけしきは、をかしとも敢果なしとも、いはむ方なし。況して人目も草もといひけむ山里のさまなどは、繪にかきたるだに都人の見なば如何なる思ひかせましいと見所なき田の面は、稲がらばかり朽ちて、殘りたるに、水もかれ〴〵なるは、年の寶はとりてむろやにをさめたるみちなればなるべし。あやしき橋のたもとはくつれてゆがみたるに、川瀨にたつ人だに見えぬは、いざりする翁もこの頃はうちひろみぬればにやあらむ。短き日かげのたけ、左ざまにかたぶく程、まむらなる梢をもれて草の屋にかゝりたる、赤ねさす雲のたゝずまひ、見る〳〵かはり行くなど、都にては見

るべくもあらず。しげりたる眞木の葉自垣となりて、雀のやどりとなれるもをかしく、積み重ねたる藁くづ、自しとねとなりて、馬の草はむもあはれなり。やう／＼暗うなりて火かげの壁よりもるゝに、住む人の心はいかならむとおもひやるだに心細し。道に行きくれたるをりなど、一夜の宿り求むるに、むつかしげなる翁のまめ／＼しく、あるじするに、初めて田舎人のゆかしさは知られなむ。爐の内に太やかなる割木さしくべて、うちくつろぎたるもの語りなどするに、先寒さは忘られぬべし。里のかすゆ酒に見もしらぬあつものさへあるじせられたる、うつし世の醉とはいたくかはれるを悟るべし。足うちはときつゝ、つふ／＼と語り出づる翁のことの葉は中々捨てがたきふしおはからむ。諸共に一ッむしろにつゝまりて、さむしともいはず、はないき高ううちやすみて、秋のいたづきをも知らぬげなる、あはれならずや。雪のあしたなど童の早う目醒まして、立ちさわぐに、翁もやがて起き出づめりくづるゝはがり笑みかたまけて、みのりの豐かなるをよろこぶげなるは、子等の幸あるを悦ぶなるべし。上田くぼ田は、一つらに白金しきたるが如くなる、橋のあなた烟の立ち登りたる、いはむ方なし。朝獵にいで立つ犬をかしき跡止めたるに、梅か香ろこむかとなく、くゆりきて何れとも見分かぬなど、忘れては仙人のかくれがとぞ思はるゝ。物のさびしきこところあれ、猶めづらしき田家の冬のけしきなりけり。

砧

濱荻生

つゞれさせてふ虫の音に催されてや、機織てふ虫の聲にさろはれてや、此の頃殊に聞ゆるは砧の音の木魂に響きあへるなりけり。

軒に聳ゆる松吹く風、俄にはだ寒き夕暮。早う門鎖して、灯火かゝげつゝ、文など讀み居たるにあなすゞろ、はと〳〵と打ちたゝく音たゞ耳もとに起りぬ。されどこの音や、しきると思へど絶え、と絶ゆと思へどしきるこそいぶかしけれ。月影に浮れてうつ人の心も空とやなるらん。誰がすさびぞなどいよゝゆかしきまゝに、やをら窓の戸細目に引きわけて見出せば、月は大空清うすみ渡りて、星影まれに森より出でゝ、森に入るさゝら小川の行くへ、遙白うあらはれて、げに地上の霜か。

きぬたの音は透い垣の一重かなたに今ぞすみのぼる。あはれ〳〵夫は二千里外にありて、おのれ獨空しき閨守る賤の女が、秋の夜寒におそはれて、かくはうつなりけり。年は二十ばかりなるべし。白ききぬ頭にかけたるは、さやけき月に恥ぢて、人目を忍ぶにや。をりをりまみのあたりかいぬぐふは涙の露の如何にしげからんと思はるゝに、まして聲もらさぬぞ鳴く虫よりもいと哀なる。

照る月に砧とるせなを思ひやりて
きぬたの音のしどたゆむらむ

さきに心も空と思ひやりしことの、今更恥しう、同じひゞきもきもにこたへて、身さへ骨さへうちくだかるる思ひなりや。

餅つき

井上頼文

しはすの廿日ごろより家々こぞりて餅を搗たつるは、來む年のはじめに神々にそなへ、人々も雜煮に調じていはひものせんとての設けなり。そのさま上下のけぢめはあれど、おほよそ市中の店にあつらへてもつかせ、又賃錢或は引ずりなどいひて、搗手四五人して、竈蒸籠臼杵薪など何くれの物擔ひありくをやとひて、つか

する人糯米をわたせば、やがて其家の前にてむしたてつきたつるさま、よそめにもこゝちよし。さて搗きとゝのへたる鏡餅、俗にはすわりといへるを臺にのせ、根松裏白藪柑子昆布海老などめでたきものゝ限りもてとり飾り、まらうど居の床にすゑおくことなるが、家家のならひにて、小さきは六七升、大きなるは一斗二升あまりなるもあり。鏡餅としもいへるは、形の丸きによれるならむ。昔は正月元日歯固といふ式の具に、むねと用ゐたりしそのかたをかり今に殘れるものなり。歯固といふよしは、人は歯を命とするが故に、歯の字をよはひともよめる、歯固は齢ひをかたむる意義なり。さて此式のありしさまをいさゝか擧いふべし。江家次第卷一に元日平旦天皇御二東廂一(清涼殿也)自二御厨子所一所レ供御臺二本(中略)有二餅鏡一(用近江火切)また榮花物語に、うへわか宮にもちひかゞみを奉らせ給ふ云々　近江の火きりのもちひを用ゐるゆゑにや。此國の鏡山のうたをなかむるなりとある、その歌は、古今和歌集に見えたる大伴黒主のよめるにて

近江のや＝かゝみの山を＝たてたれぞ
　かねてぞ見ゆる＝きみが千とせは

といへるなり。又源氏物語にも「はがためのいはひしてもちひかゞみをさへとりよせて、千とせのかげにしるき年のうちのいはひごとゞもして」とも見ゑ、玉海(月輪攝政兼實公記)建久五年、正月一日、癸亥、巳剋、手水陪膳文章博士、業實朝臣歸入見レ鏡如レ例女房於二別屋一著二白袿一見レ之云々また明月記(中納言藤原定家卿日記)元仁二年正月一日癸亥依二吉日一見二歯固鏡一ともみえ、永久四年百首元日をよめる源俊頼朝臣歌に

けふよりは＝われをもちひの＝ます鏡
　うれしきかげを＝うつしてぞ見ん

などあるにても、そのさまおもひやるべし。又搗たる

日、のし餅といへるを、ほどよくきりて、西京にては、せんざい、東京にては、しるこ、といへるにもてうし、或は駿河國の靜岡に名だゝる安倍川餅といへるにも調じて、親しきどちたくりもし家人つどひて、いはひたうぶることとなりき。又さゝやかに丸めたるをあまた柳のきり枝にとりつけたるを餅花といひ、子らがもてあそび物ともなすめり。これもむかしは竹につけて壁にさしおき、彼雛祭りに備ふるものとせしよしなり。すべて年のとぢめのいとなみ事どもくさぐさなる中に、これをしもたれもたれも大事とするは、世の諺にも云云を餅につくといへるにてもおもひしるべきなり。

歳市

秋劍

百敷の大宮人もいとまなき年の終になりにけるかな

と、桂園の翁の云ひけむ、げに、上下おしなべていろがはしきは、年のくれにて、明日は笑顔して禮に來べきも、今日はかぎりとて、はたりわめく鬼の聲、いたる處にかしがましく、世の中、何となうさわがしげなり。歳暮のやりとり、言へば更なり、年玉、餅、屠蘇、門のかざりなどなくてはならぬものなれど、妻子にも新しき衣なくてはならずと、心をくだく人も多かるべく、餅つく音、煤はきの音と相まじはり、路ゆく人もしづ心なく、よろづすさまじきさまなり。

都には年の市とて、神田明神、深川八幡をはじめ、その他の宮々の境内に、あきうどの店出して、物うるもの多けれど、神の祭りの爲にはあらで、たゞ新年に用ゆる品々をひさぐなりけり。冥途の旅の一里塚なる門松も、さすが青々として後凋の色に出で、青竹の之とならべるも、おもしろく、偕に老ゆといふ海老の、いと大なるが、赤き甲して、ひげ長くのびしたる、いとをかし。纍々たる橙の側には、裏白しろき葉をひる

がへし、七五三飾の下に、昆布のさかれるも、よろこんぶの名におひて、新年をいはふ品物なるべく、なほ紙鳶、羽子板などの店ありて、いとにぎはし。

歳の市には高貴の人は行かで、多くは中等以下の人々なりけり。冴え渡れる冬の空高くして、月小く、北風獵々としし肌を刺し、電信のはりがねも悲鳴の音を發すれども、なほ人足は繁く、二重外套に頭巾さへかぶりて、目と髯のみ光りて見ゆる側に、體にショールかけ、お高祖頭巾かぶりたる女のならびてゆくは紳士



といふもの、夫婦なるべく、これをよき客として、書生もあれど、職人もあり、いとけなき子らは、羽子板、紙鳶などうる店の前にたちて、かれこれと、氣に入るものをゑらぶめり。

歳のくれにとゝのふべきものとて、寒き空をもいとはず、歳の市にゆきて、おなじもの買へど、貴賤老幼によりて、歳を送るの感は、さま〴〵なるべし。少年の歳月は長く、老いてはいと短し。今何日たてば正月にかと待に待ちつゝ、歳市にて買ひたる紙鳶、羽子板を枕元にならべて、すや〳〵と眠れるうなゐ子は、世にものどけき夢を見るべけれど、正月までのとて夜もねむらず、家の人々の新衣縫ふ母の心は、いかならむ。思ひしことの半ばも仕遂げず、昨日とすぎ、今日とくれて、はや歳の暮となりけるに、今更に光陰の早きに驚きて、人生のはかなきをかこつはなべての人の心なるべし。げに歳月人をまたず。されど、時は黄金なり、

世は時と共に進むものなれど、惜しくもあれど、また惜しくもなしといふも、また例のひがみたる心にや。

年々にいよゝさか行くれは御世に
ふりまさる身を歎つべしやは

無慘

石樗千亦

長國寺に入相つぐる鐘の音、いとあはれに響き渡り、群鴉、立山の森に、塒あらそふ夕まぐれ、花籠たひて、笄町の我家へ急ぐ女あり。年の頃は、三十の上を一つ二つ、みるの如く、わゝけさがれる衣を纏ひ、丈にあまれる黒髮も、いつ梳りけむ、たゞかりそめの櫛まきに、塵は處を得がはなれど、涼やかなる眼、透りたる鼻に昔あらはれ、綠の眉は、一度そりたどしけむも、今またや、生ひ揃ひて、霞の中に横はれる遠山の如く、轉、粉しろく、唇紅なりし折ぞ忍のばるゝ、今しも、

家に待つらむ子どもの、心にはかゝるものからも夫の墓處、余所に見過さむも本意なしと、青山の方より、坂道おりはてゝ、我家さへおぼろに見ゆる、霞町にかかれるを、又引返して、共同墓地の片隅に、立てゝ幾年になりぬらむ、墓標の墨は流れて、文字の跡のみ、高く洗ひ出されつるが前に、賣れ殘りの草花、一枝二枝手向けて、はかなく此世過させ給ひしより、はや三年と年月もあだに過して、まだしるしの石だに、たてまゐらせぬくやしさ、子どもの養育に、日も時も足り侍らで、かくの仕合ふがひなし、と叱らせ給はむも、かねての覺悟、唯々片時も早く、子どもを人となして、君の後をもつがせたく、この子はかく、と見せまつりたきが一つの願、はや源一も十五になり、讀書も一通りは教へおき、殊に年よりはませたる質なれど、など高く低く聞ゆるが、やがて立あがり、名殘は盡き侍らねど、彼等もさぞまちてあらむに、又と生けらむ人に、物いふが如く、獨語つゝ立ちてゆく、日はくれはてゝ、あたりは物の影だに見えず、杜鵑の、血になく聲のみ高きに、さてもなれが涙か、今手向けつる花も重げに、おく露深し。

理學士倭忠雄が、一たび榮位を擲ちてよりは、世の招きにも從はず、あらゆる金子を資として、わが智のつづく限、わが學の及ぶ極み、わが腕の折れなむまでは、と、勉めに勉め、勵みに勵みて、いそしみつゝ、ある發明にかゝりし後の形見は、心をこめてとりあつめつる、種々の器具と、材料の片々とのみ、うらめしげに殘れると、其折十二才なる、源一を頭として、乳呑兒まで、あはせて四人の稚子あるのみ。思へど忠雄が、かの才をもて、かの學をもて、ひたや籠りするをこの男よ、と世に笑はれ、人に嘲けられしをも顧みず、いかで、人並にてはえあらじ、人にすぐれ、世にまさりたる發明して、後の世にもめではやされ、語りつぐべき

名をも立てむ、と頼めりし熱心も、一朝襲ひ來し、虎列剌のためにはかなくなりて、たゞ片時の病氣に、夕の露ときえはてゝ、殘れる器具を見、材料を見るにつけても悲しきを、まして、妻の孝子が心の中ころ思ひやられ。父はいかなる御身にて、如何なる事をなし給ひしか、われは、もとより花實にて、わが家は、これを世々に傳へ來し職なるかとれもひはせぬか、と何もしらぬ子どもらを見るにつけては、たゞ歎のみいやまさるに、夫うせて後は、日比、兄弟よりも親しく、なき夫の交らひ給ひ、われもふかく頼めりし人々も、いつのまにか、影も形も見せ給はず、此人は、と只一人殊に頼みまつりしは、袖に涙のかゝる時、心の奥もあらはれて、いと嬉しく、せめて、この方だに來ます間は、また子供の教育のことも、はかりて頼まむもの、とれもひし人さへ、あゝ、思へど身の毛もよだつ嫌らしさ、あゝ、今思ひ出でゝも身ぞをのゝく、親切と思ひしもあだ、頼めりし心もあだ、さてもさる人とは知らざりし、鬼よ、蛇よ、といたく耻しめけれど、其日かぎり、いよ〳〵、頼りなくなりし身ながらも、つまりは心安しと、思ひしことも、あだの又あだ、其折よりの苦しみ、思ひ廻せど、あゝ久しきこと。

菊咲きぬ、ときゝては、手携はりて、團子坂に物し、葛飾に遊び、紅葉の錦色に出でぬ、といひては、瀧の川に車を共にし、海晏寺に、寺詣を名とするなど、樂しかりしも、唯一時。主の發明の事にかゝづらひ給ひてよりは、さる事もなかりしが、功の成るを樂しみにと、かよわき女の手一つに、數多の子供を育てあげしも、ただ一時。あはれ、藤衣の乾かぬ袖に、散りかゝる紅葉を見ても、千代と頼みし菊の花の、うつろふを見ても、皆我身の上につまされて、いづれ歎の種ならぬはなし、など何につけても、孝子の胸は、はりさく思ひなり。悲しき中にも月日はたてど、たちかねて彌增にはろり

ゆく、其日々々の畑の末ぞ思ひやらるゝ。木葉を誘ふ木枯に、降りみ、ふらずみ、時雨るゝは、空も涙をそへむとてか、ながめ勝なる孝子の一家は、軒傾きても、柱は朽ちても、一人だに顧る人もなく、門を閉し、蔦かづらも、生茂りし庭の八千草も、いつしか末枯れて、人跡はいよ〳〵遠ざかりぬる夕べ、孝子は涙にし拭ひ、夫のうせ給ひし悲はさることながら、子供を餓に沈ませもせむ、冥途にて何といひわけのあるべきぞ、今は御形見の子らを、いかにもして人となし、これ見よかし、父はなくとも子は育つ、人ともなる、と世の中に出しても、恥かしからぬやうにするが、せめて、夫に盡す務の終、いで、女ながら倭忠雄の妻、いかでめゝしく過すべき、あゝ、吾ながら迷ひてころありけれ、今泣はすまぬことゝはしりつゝも、夫を頼み、何一つなしつることもなかりしが、いでや、これよりはわが世、わが身の盡すべきはこれよりぞかし、とをゝしく思ひ返しはかへしつれど、いかにせむ、今の身の上。

餓はせまり、我身はいかになりぬとも、子供らに不自由させじと、思へども、夫が世に在し折より、何の器械、くれの材料、といはるゝまゝに、一たび思ひたちし業を、半にとゞめまゐらせむは、口をしき限なれど、いかにしてもと思へども、坐ながら食へど山もつく、とかいふに、限ある金子、つきて後は、日比愛でにし、身のまはりの物をはじめて、一品二品と賣料なしては、其費にあてぬ。苦しみをしらぬ子の頑是なさ、某は、面白き本もちて來ぬ、同級の生徒は、揃ひのよき靴はきて來ぬ、是なくては、といふに、さぞ肩身もせむからむ、と三つに一つは買ひても得させつれど、二人三人の玩弄品まで、つゞくべきにあらねど、ろれとなくなだむれど、聞かず、聞分なし　叱れど、すねて泣き、泣けど、やかまし、と叱り給ふ、御邪魔にならむ、と思へど、さまでいつゞかず、又なだむれど、

愈なくに、何故泣くとの給ふゆゑ、云々と申せど、夫ならで買ひて得させよ、うるさきに、との給ふ、さりとては、と又小言をいへど、此度は、父を味方に、愈叫ぶに、せめて、この幼子のなからむには、とまで思ひつることもありき。夫のありし折より、かゝる樣なりけれど、よきものゝ中にて、奢がましきものは、大方盡してありしに、ゆくりなく失せ給ひてよりは、膽さえ、力もなくなりて、何することもわすれ、唯徒らに、歎に沈みける程に、迫り來ぬるは、夫を誘ひし、恐しき病にはあらで、しかも四人の者の、命迄とらむとする饑さてはかくてゐられず、と思へど、何とせむ方もなし。

水仕奉公になりともいづべきか、四人の子供をいかにせむ。兄は早十二にもなりぬれど、又如何にともすべきを、さりとて、猶三人は殘れり、まして、乳呑かゝへたるに、雇ひくるゝ人もあるまじ。里にやるべきか、其料のあるほどならで、何の苦しむこともあるべき。あゝ、斯る程ならで、夫と共に恐しき病に仆れしならで、と思ひなやむ折もありしが、いかに歎けばとて、悲しめばとて、福の來べくもあらず、いでゝ求る外はあらじ。何か資のいらぬ商して、と思へど、このせち辛き世に、さるよきこと、人はすてゝおかじ。況してなき夫につけても、今は、亡びて後もなけれど、我家の祖先につけても、人に指さゝるゝいやしき業はならじ、よしや饑うとも、三人のいとし子をもかつゑしむとも、と心一つを、千々に碎きゐしに、花や、花、とうりありく聲のきこゆるに、さては、日頃親しき大久保の爺よな、これぞ、これ、天の助け、譯をかたりて、是迄の馴染がひに、それよ、いやしきは同じことなれど、よろめには、美しう、おくゆかしきあの花賣われもあれにならむ、あれをおきては。女のすべきことあらじ、と呼びいれて賴めど、涙をそへて資を

かし、賣るやうさへ敎へられしも、はや三年に早し、と指をりかぞへぬ。

母の、花賣に身をやつせし折なりき、源一は、母上にさまで心わづらはせ奉りて、われは學校へゆく氣もなし、さりとて、丁稚奉公に出れど、母上に仕ふることもならず、其上商人になりたき心もなく、いかに賣買の道に明るくなりぬとも、せむなき事なれど、去ぞしの隙にても書よまむ、と心を定め、母に乞ひて、いささかの資を得、品川にゆきて、あさりを買出しきて、右に、左に、賣りあるき、此新花賣と、新あさり賣の母子は、二人して、八百八町を一日の中にふみわたり、花めせ、花めせ、あさりゐ、あさりえ、の生わかき聲は、聞ゑぬかたもあらざりき。

花賣にて終らむは本意ならねど、いかにせむ、其日其日の手づきに追はれて、去ぞしは止むべくもあらず。幼き子どもに、れもき荷負せて、耻さらさするは、後になりて、父のあとをうけつぎ、事をなしたらむ日になりて、名にもかゝれど、させまじとは思へども、されどとて、花うりて得つる金子、幾何もあらず、迚も、母子五人が過ゆくこともならざれど、目をとぢて、苦しまするとのくるしみは、中々に、子にもまさりぬべし、況して、幼きながらも、さかしき父の質をうけて、終日ありき苦しみ、疲れたる足をすゝぎ、やてが、遙々と神田迄、書かゝへて通ひゆき、雨、雪みぞれのふる日も、雨具もたぬ身のぬれそほぢ、風吹きたちて、塵、芥、目もあくまじきにも、通ひて怠ることなく、僅か、二年に足るか足らぬに、すぐれての出來、そをきくごとに、そを見るごとに、うれし涙にくれ、斯くてこそ父の子、父の後をつぎて、いみじき名を殘すべきはこの子ぞ、と嗜よき女ながらも、人にもいひ、心自らにもほこりて、わが子ながらも、蔭にては手をあはせ、引のぞすが如く、理なしとし

りつゝ、なは、神にも祈りぬ、佛にも。花實も、幾らの得意を得、わさゝ買も、買手ます〳〵多くなりて、貧しかりしことも、苦しかりし折も、忘れなむとするに、まさりて嬉しきは、源一の學業は愈々進み、十二才になれる藤子は、尋常科を卒業し、二つ下なる橘子さへ、早、尋常二年を卒へし免狀、母上、兄樣、これ見てよ、と嬉しげに持歸るを、見れど、いづれも、優等の賞の品さへ賜はりぬるに、母の喜いかならむ、せむき袂にはあまれるなるべし。

今年は早、なき夫の三年にあたれど、形ばかりの法會營みけるに、孝子は今更に悲しく、かく子供らの、生立つさまをも見まさで、とく失せ給ひしは、返へす〴〵も悲しきことゝて、一人々々の身の上につけて、くはしく口の内にいひつゞけぬ。平二、ろなたも佛さまを拜まぬか、と二人の姉がいふに、坊はいやなり、とて頭ふるを、父樣を拜まぬのか、ときけど、父さまは何處にぞ、といふ、こゝに、と墓標を指ざせど、内のとゝ樣は木か、といふ、をかしさに、笑ひながら母は咽びぬ。

墓所より歸り、今宵は源一も休みなれど、いつもよりは早く寢所に入り、母子五人は、快く打伏しけるが、いと暑ければとて、夜半まではいもねざりしが、曉になりて、母の、頻に苦しむ樣なるに、源一は、ふと眼さめ、母樣、いかゞなされしか、と問へど、答へもいと微かに、見るまに、舌つり、かきくるしみつゝ、弟妹を起す間もなく、既く、現世の人にあらず。あまりのことに、心もそゞろに、醫師をよむむも、はや、冷えきりたる身には、せむもなからむ、まして、この便わしき處、藥とて間に合ふべくもあらず、と妹にいひつけて、其邊に穢れたるものを、悉く淸めさせて、歸らぬ事を思ひつゞくる中にも、妹等は、四方より、圍み、聲あげて、ひたなきに泣く。平二は、眼さめて、母樣、

乳々、とよぶに、いつのまにか、夜もあけたれど、隣よりも來て、何にもせよ、醫師を、といひて、自ら呼來り、見すれど、思ひきや、〱、夫が恨を抱きて、仆れしと同じく、惡しき病ならむとは、去かも眞症ならむとは。消毒は施されぬ。交通は斷たれぬ。源一はじめの泣聲は、ろともにきこえわたりぬ。さても無慘、翌日になりて、藤子は又も病に伏しぬ。とかくするまに、橘子も亦打伏しぬ。守りの巡査は黙きて、直に官廳にしらし、醫師も馳來て見れど、あはれや、こも同症、さてはと、避病院にれくられて、門を出しぞ、この家の名殘にして、やがて、この世の名殘なりけむ。二たび、兄をも訪はず、弟をも顧みず。一日の間、一家の中にして、かくまで變るべきものか、五人の母子にして、殘れるは、唯二人のみ、冬の中に、夏は來ぬとも、いかでかゝらむ。警署にては、此家になほ餘毒ののこれるをもはかられず、と二人を、假に他の家にうつしぬ。源一は、あるにもあられず、いかなれど、我家は、かくまで幸なきか、かくては、我身の父の業をつがむことも、此類になりゆきもやせむ、など思ひくづをれて、泣沈みけるが、平二は、何の事ともわかず、姉樣〱と、右にさまよひ、左にまどふかと見れど、乳よ、〱、となき、慰めむとする兄も、猶涙ぐめるを見て、又更に泣叫ぶ。警署にも、いとあはれがり、人も聞傳へて、菓子、玩弄品などれくりくるに、こを與ふれど、忽ちなきやみて、すゝりながら、笑ましげになりゆくを見ても、兄は、いよゝ咽びぬ。天は、いつまで、倭の家につれなきか、地は、いつこまで、此兒らを守らざる、なき父、なき母も、見てはあらぬか、無慘、極めて、無慘、其翌日になりて、源一は、又もや避病院にとて、巡査に送られながら、發明、〱、とうは言いひけるが、やう〱聲細りゆきて、嗚呼、遂に聞えず、かくて、八百八町、至る所、花め

せのうるはしき聲も聞えず、あさり〳〵とつゞけよびし、らうたき聲もたえて、笄町には、永く、風雨にあれ、月のすむに任せたる、不住の家のこりぬ。程經て、同町なる育兒院に、父の名を知らず、母の顏見しことなき捨兒、我が生れける家はこゝぞ、と思へる稚子などゝともに、乳をよびて、母を戀ひ、兄を呼び、姉を慕ひてなく兒あり。其父母はしれてはあれど、まだ、幼かりければ、わづかに、父樣、母さま、としりしのみ、其名をぞしらず。さても父の思ひつきしわが、母の志、兄がつがむと勸みし、なべての人の心づくしは、たゞ、この子一人の身にのみかゝれり。しかも、そを誰かこの兒に傳へむとはする、はた、其心づくしのほどをさとりて、其家を起し、名を顯はすべき時や、はたして、いつのことならん。

女心（下）

白魚女史

ものいふ母の顏を見て、ふぢ子のつかへもとけにけむ、幾度か醫師にあつく禮を繰り返し、母親の手を取りあげて、うれしや母樣、ものいはれてか、嬉れしや、是れまでは何くれと、御心をのみ痛めまゐらせし愚かさよ、今更に見奉る面も恥しう侍る、ゆるし給へ、今よりは夢忘れても、御心煩らはせまゐらすやうの事はせじ、仆れむまでも、必ず母樣の御存念を晴らし申さん、明日よりは學校にも行かむ、誰が何といふとも、思ふとも、わが心だに曇りなくぞ、何のうしろ暗きことのあるべき。母さま、今よりはかならず御心をいためまゐらすやうの事侍らじ、どうぞ今暫時の間、今までのやう、勿体なけれど、御辛苦を遊ばしてやと、泣きつ、詫びつ、取りすがる娘の手を、しかと握り、あな、ふぢ子、何處へか行かむ、父上の所へか、そは母も

ともに行かむ、父上だにおはしなば、かゝる苦るしきめをも見ず、つらき思ひをもさせず、島崎の令孃よ、學者の娘よと、世にもはやされ、人にもかしづかれてんに、早う世を去り給ひしばかりに、此の母のいひがひなき手もとに、賤しく育てられば、學校に出でゝも、人の中に交りても、嘸かし口惜しく思ひわづらるゝ事のみ多からむ。かゝる甲斐なき母を持ちしばかりに、今度の病にも取りつかれしならむ、ふぢ子、やよ許してよ。日來物毎に潔ぎよき御身の、さばかりに思ひ鬱ぎしは、よく〳〵つらき事のありてならむ。母にも告げず、ひとり思ひてはいかばかりか、つらかりけむ。わるかりき母がわるかりき。ゆるしてよふぢ子、さはうきめを見せしも、汝れつらかれとにはあらず、父君の忘れ形見、如何にもして、さすがは人の子ぞといはるゝほどの人となし、草葉の影の御心をも歡ばせまゐらせ、かつは天晴れ美はしう育てしよと譽られんものと、愚かにもおもひ込みたるが迷ひゆゑ、あはれや花の盛りをも、むざ〳〵と散らし果てたる悲しさよ。さるにても浮世や。かゝるうき世に住まむよりは、ふぢ子よ、疾く諸ともに父上の許へいそがむ。何を泣きてか、泣く事のあるべき、いざ〳〵と手を取りて、立上らんとする例ならぬ樣子、氣や狂ひたる、魂やまどひたる、あな母さま、何を仰せ給ふ。妾は有り難き御蔭ゆゑにぞ、かく恙なく元のやうなる身になり侍りぬ。母樣よ、のう母樣、御身も御心をしづめられて、元のようなり給ひてよ、あな母樣、何をかの給ふ、父上は此世にましまさぬものを、あな母樣、こゝは極樂にも冥土にも侍らず、もとの飯田町の家ぞ。のう母樣、あな妾がかく申し居るを、亡くなりていふとやおぼす。許させ給へはゝさま、かやう御心を狂はせまゐらすも、皆いたらぬうまれより、ふつゝかなる此の身の、年來、月來、母上の御辛苦の一方ならざりしを、妾が忍ぶとい





ふ力の足らざりしばかりに、ふつゝかなるけしきを見せまゐらせしが故の罪、思へば〳〵、横田さんの月謝の見えずなりたる不審を、わが知れるやういひかけらるゝを、知らぬ事は知らぬなり、わが清き心を頼みに、何處までも憚からず、學校に行かばよかりしものを、あまりに人々のいぶかりのゝじるに、さはとていひ説くべき證據もなく、斯くては家の名を恥かしめ、母樣の名を汚さむ、口惜しやと思ふあまりに、學校へ出ることもいまはしくなりて、五日六日心ならずも休みたりしに、母さまが、孟子のこと、孟母が斷機の事などを繰返しとかせられ、其方の今學校を廢するは、孟子が途中にて學問をやめにし時なり、此の母は孟母ならずとも、御身は世に耻かしからぬ子になりてよ、只今の辛苦は後の安樂ぞとて、涙を流し給ひての御敎訓、つく〴〵身に染み渡り、かばかりにすぐれたる母上の、敎の庭の露霜に育くまれながら、など此の身は世にはづかしき名をや負ひけむ、さはいへ、身に暗らきたばゑ塵ばかりもあらじ、露ばかりもあらじ、何を耻ぢてか昨日今日のこゝろぞ、なか〳〵に汚かりしと思ひ立ちて、學校へ出でたるに、人毎に皆妾の顔ばかりうち咏めては、もの見ゑずならずや、心したまへ、妾の何がいつなくなりし、妾の何も、妾のくれも、きけがしにさゝやきあひ、妾が顔を守りては、同じ級に彼の如き人ありては困るなり。あしき人は先生に告げて、退學させたらむ方がよし、かゝる人を此の級の首席に置かむは、此の級の耻辱ぞ。盜人の中間の首席になるがよけむなどとて、さま〴〵にのゝじられて、あまりに口惜しくなりし故、妾はさる覺えなし、横田さんの月謝など妾は知らじと、一言云ひ説かむとすれど、口を集めて、さりとて書物の間に入り居りたるが、不思儀や、紙きれに足もなきにといへど、あしといへど、歩きしやも知れずと笑ふあり、島崎さんのことを誰も云

ひはせぬ、胸に傷もちは何とか申す諺の面白さよといふわれど、何とかはたけぐ〲しきよとて、わざ笑ふもわり、くやし、むねん、いつそ先生に告げんか、先生に告げたりとて、知らぬといふ證據もなければ、濡れ衣の乾かむ道理もなし、たとへ先生の己れを信じ居らるれど、よきやうに人々にいひ解き給はらんとも、日來より贔負なとゝ呼るゝ妾なれど、なか〲に人に迷惑をかけむのみ、思へど〲ど、晴らすよしなき覺ゑなきうき雲に、心かきくもりて、閉ぢこもりたること一日二日、また思ひかへして學校に行きしに、あの鐵面皮さよ、顔の皮はうすきやう見ゆれど、千枚ぞりよりなほ厚きなど、あまりにのゝしられて、母樣の御こゝろの萬分一も、己れはゑ堪へず、折角の母さまの御志をも反古となし、此のやうにみ心を狂はせまゐらせし不幸さよ、これが人の子たるものゝ道なるか。しかもなほ妾の汚名はいつすゝぐべき道もなし。思へど今更に學校へ行くもわびし。母樣よ、母樣よ、とてもかくても、此の世には二人の住むべき宿ころなけれ。母さま、のたまうやう、疾く諸共に父君のまします處へ、連れ行き給ひてよ母樣、この世に未練なに殘るべき。

✿　✿　✿　✿　✿　✿　✿　✿

後の世や、此の世や、神樣の導きを祈りては詣で來る、浮世が原の迷子の中に、うちまじりて、此の程朝夕、御嶽神社に詣で來りて、何事か神前の砂にぬかつきて、一心に祈る四十ばかりの夫人は、此處より程近き處に住む、横田某とて、世に名ある官員の奥方さま、下男下女にかしづかれ、きぬのもの、綾のものに包れ給ひて、何不自由なき御身ながら、この頃しろ金よ、黄がねの玉よ、ます寶なき一人の娘君、富子と申すが、ふと心地勝れずとて、籠り勝ちになりてものも喰べず。木の葉の散るにもをかしといふばかりの頃を、之は玉笹のそよ〲とそよぐにも、おそれわななく事大

方ならず、すや〳〵といぬると思へど、おろ〳〵しく泣きさけびて驚き、さめては許るしてよゆるしてよなど云ひては泣く、いとしき娘のかゝるさまゝに、母君は深く心を痛めたまひ、近き所にありとある醫師は云ふまでもなく、なほ遠くよりも、誰れ彼れと世にきこえたる限りを招ぎ、色々に手を盡くし給へど、皆之は神經の狂ひたるなれど、よく〳〵心に逆らはぬやう、慰さめんより外に、療養の致し方はなしと云はるゝにまかせ、さらむとて、をかしき事、おもしろき事、日來好む事よろこぶ事、かれとなく、くれとなく、さま〴〵に心を碎きて慰さめんとすれど、いやましにわびしげになりまさるのみ。さては、世に云ふ年ごろの思ひなやみにやと、女子共に心得させ、何となく探索らすれども、これぞとおもふふしもわかぬに、母親はいとゞ心をいためて、此の上はたゞ神佛の加護をたのまむより外なしとて、日來緣日に行てすらも拜しもせぬ、御嶽の神社に、朝な夕な夫に叱らるゝをも、よき程に云ひこしらへて、茶だち、鹽だち、護摩祈禱よと、一心に祈願をこむれど、神の驗しは、いつがななく、娘は次第〳〵に弱りゆきて、身も糸のごとくに瘦せ衰へ、玉の緒もこよひかあすか絕ゆ〳〵。今朝しも窓うつ時雨の、折ふしはげしきに驚きけむ、ふと夢をぞ覺ましゝが、婢女の傍らにあるに、母上はと問へど、只今一寸いづこへかと答ふるに、富子ははら〳〵と淚をこぼし、あな、母さまはまた御嶽神社へ詣で給ひしにやあらむ。あな物体なや。如何に心をこめ給ふとも、神佛の何とて汚れたる妾をぞ助け玉ふべき。人をのろはゞ穴二つとの世の諺いまこそ思ひ知らるれ。妾は所詮死なでは叶はじ、助かる病に非じ。妾は島崎さんの母御に、とり殺ろさるゝなり。殺さるゝが、げに、妾がせめてもの罪亡ぼし。なれど母上が、いかばかり嘆かせ給ふならむ、心の殘るは母上さまの事のみ。今更に悔ゆ

とも、嘆くとも、先立つものにはあらねど、悪しき事は必ずすまじきものぞや。あまりに彼の先生を戀しく、なつかしう思ふに、彼の先生が島崎さんをのみめで給ふ事の、いと憎くればねたるばかりに、思へば思へば、巳れながら怖ろしや、あさましや、何をか彼の人にあさましき傷をつけなば、かの先生も、いとひ給ふやうなり給はんと、女のあられもなきおそろしき心を起して、十年の月日、唯一日のごとくに思ひ親しみにたる友に、なき名負はせ、刄取りて刺しゝにはあらねど、妾故に遂に世になき人となし、母御をさへ殺ろせし罪は、まのあたりの報ひ、巳れもあれほどに思し召し給ふ母さまに先き立ちて、今は地獄への旅路、いな〳〵妾のみにはなく、妾がとも角もならむ。母様もやがて、かゝる子を慕ひ給ひて。さても人の子を殺ろし、人の親を殺ろし、又巳れの親をも殺ろすとは。母様、せめて御身ばかりは此の世にとゞまり給ひて、親殺しの罪のみは逃れさせ給ひてよ。妾を悲しう覺召給はゞ、憎き子ぞ、人殺ろしの子ぞと思召て、これ限り忘れ給ひてよ母様。呉れ〴〵も親殺しの罪ばかりは、妾のかるゝやう遊ばしてやと、泣き沈む折りふし、さや〳〵と音して、庭の木の葉の時雨まじりに、はとはとと窓を打つに、富子は身を揮はして、あなおそろしや〳〵とて、衣引き被ぎたりしが、やがて又踊りあがりて、島崎さん妾が殺せしなり、かくあからさまに申すからは、潔ぎよく妾も御身の手にかゝらむに、いざ殺し給へと、木枯しの風の身にしむ頃なるに、汗を絞りにしぼりて、泣き迷ふ折ふし、富子醫師のこされしよ、此度は林さんに願ひし、島崎さんもあのかたにかゝりて、癒りしとのことゆゑとの母の言の葉に、富子は急に起き上り、島崎さんが、心よくなられしと、死なれはせぬと、ろは夢にはあらずや。母様誠にてか。學校にも行かせらるゝとや。なあ嬉れし。さらば、此

身も、人を殺さですみしか。さるにても嬉れしや、（終）

文林

初冬　東久世通禧

冬の來ししるしは見えて昨日より
けふまた寒くなりまさりけり

冬杜　高崎正風

枯木にふきあらされしあと見えて
ほころびにけりころも手の杜

冬竹　風早公紀

こがらしにそよぐを見れど呉竹の
みなれし色もさむきころかな

雨中落葉　前田利鬯

こゝちよくねふるあま夜に紅葉の
などさはがしく窓たゝくらむ

瀧落葉　押小路公亮

木枯はみねのもみぢをさそひきて
ともにみだるゝたきの白いと

深夜時雨　池田政禮

すきまもる月かげ見えず小夜更て
閨の戸たゝくむらしぐれかな

杜時雨　水野忠敬

にはかにもしぐれふりきぬ產土の
杜のかげまでいざいそがまし

寐覺時雨　前田利鬯

さよ深くきたやま風のふきたちて
しぐれの音をねざめにぞきく

庭落葉　西三條實義

いつとなく木々の落葉に埋もれて
見えずなりぬる庭のかよひ路

十五夜に月をみて　諏訪忠元

物ごとは滿ぬよろしともちの夜の

月にをり〳〵かゝるむらくも

里擣衣　同

長きよをおもひわびてや賤の女は
ねざめの里にころもうつらん

枯野　宮地嚴夫

入千ぐさはみな霜がれて小笹はら
風のみさわぐふゆの野べかな

湖時雨　北郷久政

さやかにも鏡のやまは見えながら
時雨にくもる志賀のおほはだ

落葉　千葉胤明

子もりうたうたひさしては椎拾ふ
子守がそでにちるもみぢかな

苔上落葉　遠山英一

こけの上に敷ふるはかり散にけり
庭のもみぢはさかりなれども

晩鴉　三浦千春

川しまのながれ洲先にふりつみつ
水わひてをるゆふがらすかな

世路如夢　仝

有てなきこの世はゆめか夢ならば
むかしの又も見ゆべきものを

入唐四郎春正が鎌倉焼を見て　大畑弘國

かまくらの昔をくみてたのしまん
このさかづきをわが友にして

寒夜梟　林甕臣

枯えだをわたる北風さえくれて
雪になる夜にふくろふの鳴く

河上霰　同

あゆつりしおなじ瀬なりな冬川の
氷れるうへにあられたばしる

家　師岡正胤

のちの世のさかえはとまれ我家は
かどたかくせむ出いりのため

同　同

くりやにもひとはみちたりうま車
たえざる家はかどへのみかは

寄月待友　宇野豊道

ちかひ置し月は軒ばをすぎぬれど
かけだに見えぬ友ぞつれなき

寄月旅　同

旅ごろもてらすこよひの月かげに
なつかしく見る古さとのそら

逗子所見　偃谷行

玉くしげ箱根のやまを見わたせば
かゞみをかくる秋の夜のつき

夜時雨　永石徳文

ねざむればのきのたま水音はして
風さへさはぐ小夜しぐれかな

月のわかゝりける夜とはきところよりかへる途すがら　同

たくとなき露にころもの袖ぬれて
わきのもなかの月ふけにけり

寒草　近衛貞子

虫のねをよるゝきゝし草むらも
かれて淋しくなりにけるかな

冬里　鍋嶋榮子

かけ渡すはつ木もとれて小山田の
里までひろくみゆるふゆかな

聞落葉　松平健子

夕日かげかたふく窓にみぞれかと
うたがふばかりちる紅葉かな

夕時雨　小笠原艶子

紅葉見るひとはかへりて淋しくも

しぐれふりきぬ山もとのさと

田家時雨　高崎竹子

くれぬとて賤はかへりし垣つ田に
おとなふものは時雨なりけり

風前時雨　原田蒼生子

山下しのふきのまに〳〵窓うちて
もみぢも交るむらしぐれかな

橋上落葉　中牟田常子

石橋のこけのみどりも見えぬまで
ちり積りたる木々のもみぢを

氷　三宅龍子

こぼしつる水のやりても氷るまで
朝かぜさむくなりにけるかな

時雨　小川直子

木のはふく風をさまりて明がたの
まどにしぐれの音のみぞする

樵路時雨　服部磯子

高根には日はさしながらやま賤の
かへるたもとに時雨ふるなり

年暮雪　田邊わけ子

野もやまもうずもれはてし白雪に
あともとゞめず年はくれゆく

初時雨　安東きく子

立かはる秋とふゆとのなかぞらに
けぢめを見せてふる時雨かな

庭雪　仝

うない等が庭のみ雪をまろはして
あそべるさまの面しろげなる

歳暮

林甕臣

西隣に、きのふ煤掃きの音せり。北隣に、けふ餅搗く

音す。ものへ、まかるに、大路行く人脚を空に走り惑ふ。かしこの市ぞこの市と、のゝしり騷ぐ。男の兒は、「凧かうて」と、騷ぐ。女の兒は羽子板とりて」と、騷ぐ。ことしも、暮れに成りにけるかな。一年暮らすほどよげに一夜の夢なりけりな。

とぢはてゝ葎がかどにかくれても
もれぬは年の暮れのいとなみ

おどろけど今年も暮れになりに鳧
おもへど早しこのごろのとし

暮れぬれど我身も暮れてゆく年を
年のみ暮れとれもひけるかな

霞をたどり花に浮かれしは、唯だきのふなりけり。露ふみて、月に嘯きしは、唯だきのふなりけり。

花にうかれおろぶ胡蝶の夢の間に
ことしも暮れぬ年は老につゝ

すさまじな年のなごりも限りなる
廿日あまりのありあけのつき

歲暮松

三輪義方

時雨木枯にも、つれなく、やさかつもれる、沫雪にさへ、たわまぬ操を、見ゑつゝ、年の暮るゝも、知らぬ貌なる、めでたさよと、例の、書も讀みさして、ゑどし、打向ひ居り、折しも、大路の方に、めせやめせと、いさましげなる聲にて、高う、呼ぼふなるは、門に植ゑん料にと、賣りありく、なるべし、抑門松と云ふ物は、いとふるくは、聞ゑざりし、物にて、其本は、山がつの、植ゑて、門のしるしと、せしに、もとづける、物とかや、さるは、雛人の、營みそめし、てぶりの、やう／＼、都にも、押移りて、うまびと、はた、之に習ひ、今は、九重の御門にさへ、植ゑさせ給ふ、事とはなりぬ、つごもりがたになりて、門毎に、うゑ

渡したるが、はる〴〵と、緑深う、見渡されたるは、まだきに、新なる年を、迎へたらん心ち、打せられて、心も、そゞろ、浮立つやうなるを、松も、いかに、時に逢へるを、嬉しと、思ふらん、されど、それは、時のまゞかりにて、取捨てられては、後は、芥とも、なりぬるぞかし、やをら、常磐の物と、名に立てるすら、猶、倚伏の理、遁れぬにやと、哀になん、誠や、とことはに、かう、學の友と、賴める、是の老木よ、世と共に、榮えて、特に、よごともなく、まがことにもあはで、長閑に、己が千年を、へぬべきころ、めでたけれど、ひとり、打つぶやかるゝを、彼は、いたづら人と共に、此世を盡さんことを、願はんや、願はじや、



●大御心のほど　かしこしともかしこし、

天皇陛下には、此程御風氣にてわたらせたまひ、御熱度さへひくからずおはしましゝかど、侍醫、こたびの靖國神社への行幸はとゞまりまさんころとて奏上し奉りしに、かばかりの邪熱何ばかりのことかあらん、けふまつらるゝなる兵どもの朕がために盡しゝ功勞をおもへど、とのたまひて御定の如く、行幸仰せいだされたりともれ承りぬ。一天万乘の大君の行幸あらせらるるすら、かしこきかぎりなるを、ましてこの大御言さへぞあらせらる、忠魂いかにうれしと承りつらん。天の下のありとある民草たれかはかしこしとあふぎ奉らざらんや。

皇后陛下　御風氣にわたらせたまひ、遂にこたびの行啓は御延引あらせられたり。されどその日御代拜にて御事をはらせたまふべうもやと、奏上し奉りしに御代拜は御心にもあらせられず、よし大祭の日は過ぎぬとも御心よくおはしまさん日、大御自ら行啓あらせらるべきよし仰せ下したまひしとなん、大御心のほどたれかは感激せざらんや。

●靖國神社臨時大祭　十五日は、招魂祭、十六七八日の三日間は大祭、十九日は直會式を擧げ、とゞこほりもなく、いと盛に行はせをへられたり。こたびの大祭は例とことなれどわたりの群聚も大方ならず。境内に陳列したる分捕ものゝ旗、銃、劍、大砲、水雷など、見るにつけても戰爭の當時など思ひやられつ、其他競馬花火、角力、擊劍、などとりどりにさかりなりき、ことに十七日は、天皇陛下　行幸あらせたまへり。御模樣を記し奉れど、まづ大山陸軍大臣、西鄉海軍大臣、川上大祭委員長以下、陸海軍兩省、各局各官衙の勅奏任官、總代御先着申上げ、午前十時を以つて、小松宮彰仁親王殿下、同依仁親王殿下、閑院宮載仁親王殿下、山階宮菊麿王殿下、久邇宮邦憲王殿下等を始め奉り、黑田樞密院議長、榎本農商務大臣、渡邊大藏大臣、西園寺文部大臣、芳川司法大臣、野村內務大臣、白根遞信大臣、山縣監軍、野津近衛師團長、山地第一師團長、伊東海軍々令部長、伊藤海軍次官、兒玉陸軍次官、松浦、林、柴山の各鎭守府長官、西、寺田、鹽谷、黑田、矢吹、川村、坂井の各陸軍少將、野田監督長、川口主計總監、石黑、實吉の兩軍醫總監以下、在京の陸海軍々人數十名、蜂須賀貴族院、楠本衆議院の各議長幷びに各省勅奏任官總代、麝香間、錦鷄間祇候總代、各華族總代等孰れも正裝、大禮服にて御先着、式場に整列して、行幸を今やと待ち奉れり。

陛下には御豫定の如く、午前十時三十分を以て、御出門、同十一時本社へ御着輦あらせられぬ、此の日の鹵簿は第二公式にして、陛下には通常御服裝の御軍服を召させられ、御陪乘は德大寺侍從長、奉車は岡澤侍從武官長、廣幡侍從（以上乘馬）土方宮内大臣以下侍從、式部官等にて山の如き數万の拜觀人は、聖駕を奉迎して一齊に萬歲を連唱し奉り、社內の海軍々樂隊は君が代を吹奏し、肅々たる裡に、大華表を中門に御着輦あらせらる。

此の日は朝來、空曇り小雨さへ降りて、境內の混雜は一方ならざりしが、幸ひにして、陛下御發輦の時刻より空も稍晴模樣となれり、萬衆も雨に曝されずして、御通輦を拜觀し奉るを得たり。

陛下には、中門に於て御下車あらせられ、大山西鄕兩大臣、川上大祭委員長奉迎の席を離れて、御先導奉つり、階上椽側の左右に伺候し、之より加茂宮司、陛下に神前なる御拜座に御先導申し奉りて、上段の下に伺候すれば、陛下には忝なくも神靈に向はせ右の御手を御額の邊りに翳させて、厚き御拜禮あり。終て御拜座を立たせ、社前なる額堂を步ませつゝ、中門に出御、直ちに御乘車ありて、十一時十五分天顏殊に麗はしく、還幸あらせ給へり、陸海軍大臣以下、諸員の奉送は奉迎の時と同じく軍樂隊は君が代を吹奏し、拜觀の萬衆は樂の音に連れて、萬歲を連唱し、其の聲天地を震動し、馬場にて打揚ぐる烟火は、中天に爆發して、轟たる響と共に、仕掛の國旗を風に飜へすなと、筆につくすへくもあらず。

還幸の後、陸海軍兩大臣、大祭委員長神前に進んで拜禮す、次に皇族以下御先着諸員の昇殿拜禮あり、次で勅任官一等二等麝香間祇候、錦鷄間祇候、奏任官、有位華族等の拜禮あり、次で掛官の拜禮、神職の神拜あり終て一般人民の參拜を許したるに、今まで整肅に

列を保ち居たる群衆、俄かに波を打ちて社前に駈け寄り、我先にと參拜を爭ひたり、斯くて祭官は神饌を撤し、神扉を閉鎖し祭式を終りたる頃には、中門は內外人を以て充し、實に立錐の餘地も無かりき此の時刻よりして天候又も一變し雲は漸次に厚く降雨もまた烈しくなれり。

この外にも外國武官も參拜せり、この人どもは、こたびの戰役に從軍したるものなればなりとぞ。わが國の忠死の士をあつくいつかせらるゝ手ぶり、かの國の紀念祭などゝは赴もことなれば、この人どもいかなる心地したりけん。

獨逸公使館附陸軍砲兵中尉　マインケ
佛國公使館附陸軍騎兵大尉子爵　ドラプレー
西班牙公使館附陸軍工兵大尉　コロガン
同　海軍大尉　インゴー
米國公使館附海軍少佐　パルベー
露國公使館附海軍少佐　ウーロヂョスキー
英國公使館附陸軍砲兵大尉　ヂユブレー
朝鮮留學生　李秉武

●祭祀料御下賜　今回の祭典に就き、陛下より祭祀料として、金二千圓靖國神社に下賜わらせられたり。

●慰勞金御下賜　故北白川宮妃董子殿下の御主唱にて、征臺役に隨ひたる軍人、軍屬のため、今回慰勞金募集のところ、皇太后宮殿下には、此事を聞召され、畏くも金一千圓を慰勞金の內に下し賜はりたり。

●水雷艇の縱覽　水雷艇第二十三號、第六號、第八號及び福龍は橫須賀より回航し來りて、永代橋の下流に碇泊し　臨時大祭中、毎日午前十時より午後三時まで、衆庶の縱覽を許せり、されど第二十三號を始め各艇とも、威海衛に偉功を奏して、其名譽を宇內に輝かしたるものなりと云ひ、殊に福龍は淸國水雷司令艇の收容されたるものにて、今度始めて回航し來りたるものなりと、云ひ如何で之を一見せんものと、日々永代橋頭に老若　男女群集して、雜踏一方ならざりき、この福龍は曩に威海衛より橫須賀へ回航し來りたる

後、已に修繕を加へて塗換をも終り、其艇名さへ假名文字にて「ふくりゆう」と記入し、流石に司令艇たりし丈けに、艇體も他の各艇に立優りて、大きく一際目立ちて見えたり。

●日本人を怖る　大坂時計製造者、米人ハンスベリー氏、此程本國に歸りて、友人に語りし所なりといふをきくに曰く、日本は各種の賃銀非常に低廉にして、僅々五十仙を以て、時計一個を製造し得べく、米國などにては、迚も思もよらざること甚だ多し、日本は遠からず、終に歐米各國と輸贏を爭ふに至るべし。彼國の進步こそ、殊に注意を要するものなれ、日本人の摸倣に巧にして、熟達の早きは、唯驚嘆の外なく、何物にても、一度之を見るときは、忽其妙を悟り、却て原品に卓越する良品を製造する技量は、蓋し世界に其類なかるべし。余は未た日本に趣かさる前は、極端なる自由貿易主義者なりしも、今日に至りては、飜然非を悟り、米國の一刻も速に、日本の戰爭に對する、十分の障壁を設け、自衛の工夫を講せんこと、切望に堪へず、怖るべきは日本人なりと。これのみにも、かぎるべからず。なほ外にもあるべけれども目よくみえざるなり。わか國の人もなほたゆまずみがくべきなり。

●敎育方針　文部省にては、大に平和の豪傑、即ち商工業上の豪傑といふものを養成せんとすといへり。敎育勅語を忘却せずも可なり。

●償金を小學校基金とせんとする方案　學政研究會にては、同會員たる、貴衆兩議員を始め、敎育專門家、其他重なる諸氏相會し、償金十分の一は、之を小學校の基金に充つる議を決し、建議案として、第九議會に提出することに決せり、今其方案なりと云ふを聞くに、馬關條約の償金、二億万兩に、遼東還附の償金三千万兩を倂せたる金員は、之を文武の兩途に用ひ、一分を以て、軍國の用に充て、幾分を國民智識の開發

に充つること、國家の長策なり。且つ償金の一部を市町村に賦與するは、國民智識開發の外に戰勝の紀念ともなり、兼て國民の忠義を表彰するに、最も適當なり。而して其方法如何と云ふに、償金は之を第一回、受取當時の時價に算すれば、三億一千九百六十六萬六千八百十四圓となるを以て、其十分の一、即ち三千百九十六萬六千六百八十一圓四十錢を、全國學齡兒童、明治二十七年の調査に係る、全數八百五萬五千二百二十三人に分賦するものとして、算するに、平均一人につき、三圓九十六錢餘と爲るを得べく、又二十六年の調査に係る全國小學校の數二萬三千六十六に分賦するものとするときは、一校につき平均一千三百八十五圓となる併し其分賦の方法は、成るべく學齡兒童の數を標準として、分つことゝし、之を各府縣知事に於て、保管し各學校の基本財産確定せるものには、直ちに、下附して、基本財産の一部と爲さしめ、又未だ基本財産なきものは、其の確定するまで、府縣知事之を保管して、以て基本財産の積立を奬勵し、又學齡兒童の就學をも一條件とし、此の支給金を利用して、各學校の基本財産、積立と、學齡兒童の就學をも、奬勵する一方法と爲すに在りと云ふ。

又一部の意見　償金の一部を以て、小學校の基本金に附與するに就き、學政研究會の意見は、右の如くなるが、此に對する賛成者は、非常に多く、文部省の如き大賛成と云ふにもあらざれど、又敢て反對にはあらずと云ふ。然るに、今又之れに對する或一派の論者は、曰く、蓋し我敎育制度は、所謂强迫敎育にして、國家が其費用を負擔すること、固より理の當然なるに、國家財政の都合より、今は地方に於て、其費用を負擔しつゝあり、左れど今其負擔を輕くし、又國庫が其幾分を負擔するの意にて、償金の内若干を小學校へ付與せんと欲せど、之を國庫へ積み置きて、時々補助するの

勝れるに若かず、加之今日の制度に依れど、小學校の基金なるものは、左程重き性質のものにあらず、則ち町村歳入の剰余金又は雜收入を積みて、之を殖やし、一旦急を告ぐる時に於て、之を支拂ふ位のものなり。然るに償金は、帝國將士が忠勇の結果に依りて得たるものなれど、今の基金と同一視すべからず、よし又之を小學校基金となすにもせよ、其金額僅かに三千萬圓位に止まらど、之を全國二万の小學校に割付して、僅かに一校千五百圓に過ぎず、此僅々の金額より生ずる金利を、以て小學校教育費の補助となすも、格別の利益なかるべし、其より寧ろ其金を一所に集め置き、戰勝紀念の爲め、此金を以て大學の基金となし、盛大なる大學を起し、之を獨立せしむるの、宜しきに若かざるべし云々、

●奇特なる翁　もあるなり去十日の夕、埼玉縣浦和なる、同縣會議長、大島寛爾氏の許に、股引草鞋を穿きて、着物は足立二子の垢染みて、いと見すぼらしげなる翁の來りて、面會を求めけるに、折節不在なりけれど、取次のもの、其旨を告げて、來訪の趣を問ふに、東京なる靖國神社へ献金致したけれど、其に付きて御主人へ頼み申度き事ありと云ふ、書生は翁の風采の鄙げなるを見て、献金を口實に、多少の金錢を貪らん爲に來れる者ならんと思ひ、尚も不在の旨を告げて斷らんとすれど、翁は押返して、拙者は南埼玉郡、栗原村の百姓にて、坂本文右衛門父角藏と申す者なるが兼て靖國神社へ些少なれど、心ばかりの献金して、支那臺灣の戰に討死なされし、方々の御靈に供へんと思ひしも、田舎者の事とて、其手續も分らず、又知る人も無けれど、如何にせんと、途方に暮れたる折柄、去夜の夢に日比信ずる氷川神社の神体現はれたまひて、是れより西の方數里の處に、一つの海ありて、その中に大なる島あり、其處に行けど、献金の手續分る

との御宣託ありしが、御存じの如く、栗原よりは何十里と行かねど、西も東も海には緣なき處、定めて何かの譬ならんと、方角と里數を考ふれど、御當地の外には、これなく浦和とは即ち海に緣める地名なるより、早速參りしに圖らずも、御門前を通り、大島との御門札を見て、夢の中なる大きな島とは、畢竟御當家の事ならんと思ひ、且つ御主人には、縣會議長に在する由、兼て承り居れど、御宣託、愈之に紛れなしと飛立つ斗りの嬉しさにぶしつけにも參つたる次第なれど迂散な奴と思召さず、何卒此旨御主人に、御告下されて、是非とも御面會の叶ふ樣、御取次の程願はしと、熱心面に現はれて、陳けれど、書生も今は斷り兼ねて、主人歸らば、其旨申聞け置く可ければ、明朝參られよと云ふに、翁も納得して立歸り、翌朝再び來りけるに、寛爾氏は一間に通して、翁に逢ひ、再び長々しき夢物語を聞了りて、翁が懷なる紙入より取出せし、献金の額を見れど、三圓か五圓位の事ならんと思ひの外、十圓紙幣十枚にて都合百圓ありしにぞ、其金額の身分不相應なるを驚き、怪みて、如何なればかゝる大金を献納するやと問へど、翁は容を改め、拙者は元南埼玉郡に一反足らずの田畝を所持して、微かに世を送るものなりしが、日比氷川神社を信仰せる爲め、家業も次第に繁昌し、多少貯の金も出來て、一時は村内の困窮人などに、貸與へしこともありしが、何け年經ても返す人は殆んど無きに是も慈悲の一つと貸したる金は、盡く惠與ふることゝして、其後一切金貸を止め、儉約に儉約を加へて、家業を勵み、年々貯へし金の半分は、土地を買ひ、半分は所々の神社佛閣に献納する事に極めて、今は田畝も十三町程、所持し、又慶應三年以來、伊勢大神宮を始め、其他へ數千圓を納め、殊に日本大勝利に就ては、昨年以來伊勢・出雲・熱田・氷川・大山其他の神社に、數百圓を献納して、祈禱を爲

せしとて、各社の受領書數十枚を、風呂敷の内より取出して、寬爾氏に見せけるにぞ、氏も始めて翁の身分素性を知り、且つ其熱心を賞しけれど、翁も痛く喜びて献納の手續を賴み、彼の百圓を預けて、歸りたれど、氏は直に右の次第を記して、此程靖國神社へ、其手續に及びしとぞ。奇特の翁、人のかゞみなり。

●賞及役夫　征淸の役、軍役夫の頭となりて、渡淸し、終に戰死したる、京都下京區の馬淵熊次郎、同上京區の吹田梅吉、丹波國船井の國府久三郎の三遺族へは、今回軍事公債證書及び郵便貯金等にて、一名に付、百二十圓づゝ下賜せられ、京都府にては夫々遺族へ傳達すべしと云ふ。

●温泉を發見す　攝州有馬の温泉地を距る、東へ三里にして、字生瀬一里山と云へる處の岩石より、温泉の湧出するを、此程發見したるに、大坂藥品試驗會社の技師、齋藤寬毫氏は、瓶詰温泉の試驗のみにては、手續完からざるものありとて、該地へ出張の上實地試驗せられたる結果、十分の炭素を含有して、成蹟頗る好良なるを認め、之が證明を與へらるゝ事となりしよし。

●有毒乾菓子　京都市、下京區、松原通麩屋町、西入、野口市之助といへるは、或方より、乾菓子を貰ひ受け、兩三個食せしに、暫らくして嘔吐を催ふし、頗る腹加減の異常を覺へしより、翌朝醫師の診斷を受けしに、全く亞砒酸中毒なりとの事にて、幸ひ生命には別條なかりしも、到底不具となるべき兆候ありとか、注意すべき事なり。

●百二十歲の女　去る頃米國ニユーゼルシーに於てシアヂカンミンと云へる一老婆、百二十歲の誕辰祭を催したり、此の老婆は元と奴隸にして、幼年の折り或る白人へ賣られ、其後自由の身となりて、夫を有し、今年九十歲なる一子あり、老婆は斯る高齡に達したれ

共、眼鏡を用ることなく、身体も至つて健全にして、天氣の折は杖をもつかず、住地の近傍を獨り散歩すといふ、さて善く米國獨立戰爭の事を記臆し、華盛頓をも屢々見たることありと言ひ居れりとぞ、わか國の人なりとて長命せざるにあらず、われ人ともに攝養してかゝるものに劣るべからざるなり。

●初雪　本月十四日、美濃國、岐阜に初雪あり、之を平年に比すれば、六日晩く、昨年に比すれば三日早し。

●日蝕皆既　來二十九年、八月九日、午後一時二十九分、四秒北海道釧路測候所府近にて、皆既となる、日蝕の各地經過時限は左の如し。

東京	同日午後一時三十九分一秒	右偏	八分四厘蝕
那覇	同日午後一時五十二分六秒	右偏上	四分七厘蝕
長崎	同日午後一時三十五分七秒	同	六分三厘蝕
京都	同日午後一時三十六分三秒	右偏	七分七厘蝕
札幌	同日午後一時二十五分八秒	同	九分六厘蝕

●人心　記者このごろ靖國神社の大祭なるに、けふころはとて詣でぬ、社頭を拜みをへて、ゑむし階のもとにたちて見るに、ひしめき合ひつゝ表の門より入りて裏の門に通ふもの、其數幾万といふことをしらず。或は高帽、或は束髮、正帽に、まるわげ、いてうがへし、と、氣高きもの、賤しげなるもの、群聚大方ならず。そが中に、この社頭にきて、拜をなすもの、百中一二にすぎず。甚だしきは帽をだにぬがざるものさへあり。そのさま神前にぬかづくを、うらはづかしげにするものゝ如し。盛裝をこらしたるもの多くはこれなり。そもそもこの社を何とか思ふ。かしこくも、一天萬乘の君すら、なほふりはへて御拜あらせらるゝに、ましてひきゝ臣民たるものをや、いたむべきなり。はなるまじき親にわかれ、いとほしき妻子をれきて、遠き浪路を彼の國にわたりて、海に陸に、たゞ君のため國のためと、砲煙彈雨の間に身もたなしらず戰かひて、遂に異域の露と消え、煙とたちのぼり、或は浪のみくづとなりはてたまひしを思へば、今いきながらへ

て、輕きを衣、うまきをくひてあるもの、誰かはこの御蔭にたゝざるものあらんや。さるをさりともしらぬげなる、いともはかなき人心かな。

●ことしもくれに　なりにけるかな、きのふとすぎ今日とくらして、あすか川よどみなくながれさる月日、はやのこりすくなになりにけり。かへりみれば、たゞ夢の如し。いる矢の如く、とくゆきすぎて、月日はわれこたりをまたずとは、たれもしらざるにはあらざれど、年のかゝる終りにころ、いとゞ明に思ひしらるれ。齢は又もひつと我身の上にかさなりぬ。わが得たる智識、世に立てたる功、はたしていくばくぞ。こん年はあだにはすぐさじな。

●女鑑兼題　來ん二十九年中の歌文兼題は、別に附錄として、添へたれども、なはかさねてこゝにかゝげぬ。ことしの八九月のころよりは、日に月に歌文ともによせ給ふ數、ます／＼加はりて、その數しるべからず。國家の上よりも、はた、婦女社會にとりても、いとうれしきかぎりなり。なはたゆみたまはず思ひをねり、ことばをみがき賜ひて、名吟をよせたまひね、そも／＼この歌の道はわが國神代よりの國風にして、世界にたぐふべきものなし。うるはしくよみ出てたまひ、文かしこくつゞりたまふきはゝいはず。まだゑよまぬ人、けふあすとうちすてゝ過しなば、いつかはよくせん。はじめはつたなくとも、怠らずよみならひ、つゝりこゝろみなば、遂には思ふまゝによみいで、思ふまゝに筆とりて、かきつゞることをうるに至りぬべし。言靈の幸ふ國とは今こゝにかくうれしくも生れいでゝ、住へるこの皇國のことなり。めでたきが上にもいとゞめでたく、よみいで、かきつゞりてころ、さて外國の人にもわが國のことゞかくばかりぞと、ほこることもうべけれ、ゆめなたゆみたまひろ。

明治二十九年一月兼題

兼題
- 五日
  - 歌……新年雪
  - 文……新年の祝言
- 廿日
  - 歌……鋭
  - 文……梅を見る

注意

一月五日兼題は編輯の都合もあれば延て二十日のと共に掲ぐることゝなしぬ。原稿は共に一月十日〆切りとす。さては五日發行のへは、敎の庭はかゝげずなん。

●**新年附録** として、來ん一月五日發兌の本紙には、さる貴顯方御染筆の木板色紙形二つを添ふべし。

●**我國の辭書**（つゞき）

文典と稱する書の起りたるは、全く明治の御代よりの事なり、さるは言詞を綴りて文章となす上は、一定の法則無かるべからざる時勢となりぬれど、維新の始つかた、田中、中根の兩氏、各日本文典を著はし、學校に用ひたるが嚆矢なるべし、其後國學の諸氏も、從來の活語學を今日の作文上に應用せんため、新に名詞、代名詞、動詞、助動詞、形容詞、副詞、接續詞、の類の稱を設けて、述作したりと雖も、（これ等の名稱は、既に幕府の頃、蘭學者の飜譯に其始を起せり、）名稱こそ新規なれ、其實は古來より備はりたるを、敷演詳細にしたるものなれど、埋もれたるを起したりとやいふへからん、近日に至りては某文典、某文法書と稱するもの、月に日に顯はるゝは、言靈の幸ふ國柄の漸く顯露するものなるべし。

言詞をいろは、又は五十音に分ちて、彙輯し或は解釋を加へたるもの、古く藻鹽草、（これは分類なり）歌林樸樕、哭竹集の類ありと雖も、皆歌學者流の作にして、歌によむべき詞のみに過ず、寛政中、伊勢人谷川士淸の著はせる和訓栞は、廣く諸の言詞を五十音に分ちて解釋を加へたれど、此書をこそ我が國の辭書の始と

いふべけれ、かつ其書を三篇に分ちて言詞いと多きは、一個人にして能く有益の業を創めたるものと感ずべし、次に文政中石川雅望の雅言集覧あり、これは萬葉集以來の雅言をいろは分とし、本文をも引出たれど、言詞の例證をみるにいと便りよく、註釋は下さゞるもおのづから言義を知るべし、明治の後は、言語學盛となりたれど、既く近藤氏の詞の園ありてより以來、山田氏のいろは字典、大槻氏の言海の如き、全く西洋辭書の體に倣へる簡便の書も顯はれ、近日は又物集氏の集めて大成を爲したる、日本大辭林の良書も刊行成りたれど、和訓栞の如き、解釋蕪雜なるもの、雅言集覧の如き、雅言のみ彙輯せるものは、今にしてたゞ考古學者參考の用に必要なるのみ。

言詞の原義及び變遷を記せる書、古來聞く事なし、徳川時代文運の開くるに至り、漢學者に却て其人あり、其は元祿中貝原篤信の著はせる日本釋名なり、今となりてはいまだしき說多かれども、かゝる筋に思ひよれるは、漢學の餘力なるべし、但し翁は我國の假字文を多く讀み、又歌をもよまれたるによりてにやあるべき、次ては享保中、新井君美の東雅なり、此書は和名抄に載せたる名稱によりて、其名義を正史實錄に考へ、詳細に解說せるものにして、著錄の旨を按ずるに、爾雅の釋言釋訓に據て思ひよられしのみならず、曾て羅馬人に對面しつる頃、西洋の語法の事をも聞知られたる故にもや有らんと思はる、其はまとれかくまれ、加茂、本居の國語興立者に先だちて、既に此撰あるは、前に云へる歌文の上より起りし語學とは、又別なる卓見といふべし、此書の事は、去二月中發行の、史學會雜誌に、上田萬年氏の言語學者としての新井白石と標せるを載せて、悉しき論說あり、又文政の頃、大石千引の著はせる、言原といふものの有る由なれど、おのれいまだみず、聞く所に據れどあながち良書にあらざるか如し、元來語源を考究して論說する事は、いと難き業なれど、爾後數年の星霜を經、言語學もいたく進步したらん上ならでは、明辨を窺ひ難かるべし。

敎の庭

十二月二十日　兼題梅花先春（天地人の外は原稿到着順なり）

天　周防國佐波郡三田尻村　荒瀬布佐子

春またてにほふを見れぞすゝむ世に
梅やれくれぬこゝろなるらむ

地　岐阜市住吉町　松原保子

進み行く御代のためしにならひてや
はるにさきだつ梅のはつはな

人　三河國寶飯郡牧野　丸山須磨子

うぐひすも初音をいろけわかやとの
梅ははる日をまたでさきけり

なへて世はまた冬ながらうめのはな
にほふあたりははるめきにけり　鈴木美惠子

ふゆのうちにほゝゑみそむか梅か枝は
さしにふたゝびにほふなりけり　牧野幸子

冬ふかくつもりしゆきにうづもれて
香こぞしるけれうめのはつはな　牧野裕子

日数ふるゆきのなかにもうめさけは
まことのはるのこゝちこそすれ　進藤もと子

すゝみ行く御世にならひて梅のはな
はるまちあへす咲き初めにけん　高井孟子

ちろゆきの庭のながめもあかなくに
はるのいそぎのうめさきにけり　永井さい子

風さむみひさめもかろゝふゆの日に
ひさりのさけくさけるうめかな　國武すま子

世の中のすゝむにつれてそのふなる
うめもふゆより咲きそめにけり　諏訪晴子

梅のはないろはわかれさゆきの中に
はるなよそひてはやさきにけり　楠和子

こん春にさきたちそめてわかやさの
うめもいつ志かはなさきにけり　島田好子

あつさ戸はるにさき立つさしなれさ
うめのはつはなにほひ出に　木村綠子

冬ふかきゆきのなかより咲きそめて
はるやちか志さ笑かほ　せけり　野田千代子

にほはすは雪さのみ見てすくさまし
ささのかきれのうめのはつはな　中島房子

やふし分ぬみよの光りにはるまたて
ひさきのうめのほころひにけり　荒井清子

冬かれさなかめすてたろこす夜より
はるにさきたちうめさきにけり　芝田源子

白ゆきのまたふるさしのなかかきに
はるなもまたてにほふうめかゝ　松原常子

草も木ものこるえだ葉のあらぬまに
はるにさきたちうめのはなさく　小川金子

柴の戸もひらきかねたるわがやさの
にはのうめが枝さき初めにけり　浦島龜子

日の廻るみなみのゝきのうめが枝は
はるにさきたちにほひ初めけり　長島あや子

ちか付きし春も知られてわかやさの
かきのうめが枝ににほひそめたり　根岸純子

うくひすの來啼くはる日に先たちて
志つがのきはにうめさきにけり　成田波子

野も山もはるのけしきはみえねども
うめのはつはなさきそめにけり　遠藤花子

こんはるの消のしなりさききそめて
野にもやまにもにほふうめが香　近藤錦子

はる風のそよがぬさきのうめが香は
きみをいはひてさきそめにけん　澤田俊子

かきの面の雪やにほふさきてみれは
はるにさきたちうめさきにけり　溝口奈保子

立ち歸るはるをもまたてうめのはな
ゆきのうちより笑みそめにけり　溝口信子

進みゆくよにおくれしさはるまたて
そのふのうめのさきそめにけん　溝口寛子

はるもまた越えぬかきねにさく梅は
ひらけゆくよにおくれさるらん　岡田奈美子

ふりかゝるつゆ霜志のきゆきの中に
はるにさきたちうめさきにけり　神田樂子

おほきみの恵みくまなきみよなれは
はるをもまたてうめはさきけり　小川登喜子

日向よきいほのうめが枝はるまたて
ゆきのうちよりさき初めにけり　越山雪子

はるまたてゆきの中よりさくうめは
ゆたかなるよのためしなりけり　曾山道子

二つ三つうめ咲きそめてやまささの
しつがかき根ににほふはるかぜ　小野田のぶ子

うめをたゝ春さくらのさおもひしは
のさけき御代をしらぬなりけり　師岡千代子

梅のはなさしのうちよりさきそめぬ
かならすはるさなにおもひけん　三笠友子

すゝみゆくみ世のためしが梅のはな
はるをもまたてさきにほひけり　南淑子

うくひすにしらせてしかなうめの花
はるをもまたてさきそめにけり　富士野安香

雪の中にみつよつふたつほころひて
ふゆよりはるをみするうめかな　佐々有鄰子

こんはるもちかつきぬらん冬の中に
まつ咲き初めぬみそのふのうめ　佐山幾子

年はまだ暮れはてなくにうめが枝は
はるをむかへて咲きそめにけり　甲斐莊優子

さきはなるまつも綠りをかくすよに
はるにさきたちにほふうめが枝　曾山張子

白たへのゆき間なからもうめか枝は
　はるまちかねてはやさきにけり　島田輝子

うかれ出る時にもあらてわかやとの
　うめのはつはなはやさきにけり　町田しけ子

野のへにはつほみもいまた堅かるに
　はるをもまたぬにはのうめかな　秋園露子

はるまたてそのの梅か枝さきにけり
　ひらけゆくよのならひかほにも　大島鉄子

うくひすはいまたなかれど庭の面の
　うめはいつしかさき初めにけり　荒川靖子

もの皆のおくれかちなるやまさとに
　はるにさきたちうめさきにけり　吉川貞子

いにしへにためしなきよの例しとや
　はるにさきたちうめもさきけん　神田久子

あたゝかき君かめくみのなかりせは
　はるにさきたちうめもみましや　高橋奈美子

梅か香をみちの知るへに來んはるも
　明日はこゝよりたゝんとすらん　濱口惠喜子

かすみ立つ春日はいまたほとあるに
　そのふのうめはやさきにけり　中島蓝子

きたかせを園ふのきはの日おもては
　はるをも待たてうめさきにけり　西村さゝ子

いさゝらはこすゑのゆきや拂ひてん
　はるにさきたちうめさきにけり　青木繁子

あめつちのめくみをうけて梅のはな　遠藤梅子

千よろつの花のはるにもさきたちて
　にほへるうめのめつらしきかな　岡田紗子

あまつ日のひかりをうけてさく梅は
　ふゆともしらぬはなそにほへる　西村芳子

はる風はまたふかれともにはの面の
　うめは今日こそさき初めにけれ　秋園きく子

あらたまるはるに先たちわかやとに
　長閑けくにほふうめのはつはな　長島諒子

朝日かけにほふのきははのとかにて
　はるにさきたちうめかほるなり　水島朋子

みさをだにたゝしくあらば冬なから
　にほふうめにもおさらさらまし　堀谷よし子

冬なから先づゑみそめしうめか香の
　みさををならへあはれ世のひと　堀谷やな子

冬ふかきあしたのかせににほふかな
　先づゑみそめしうめのはつはな　堀谷よしね子

さきにほふ梅のこすゑはふゆなから
　はるまちかほにうくひすのなく　工藤ちよ子

さきにほふ梅のこすゑに來なくなり
　はるまちわふるうくひすのこゑ　工藤たみ子

あらたまの年のひかりもみゆるかな
　あさひににほふうめのはつはな　工藤昌逸子

さきにほふ梅のこすゑにうくひすの
　なくこゑきけはふゆとしもなし　工藤たか子

雪かともうたかはれけりわかやとに　ふゆなから咲くうめのはつはな　中道たみ子

あつさ弓はるまちかねてしらゆきの　かかれぬにたにうめのさくらん　小山せき子

かつきせる雪のおすひもとかぬまに　はるをしまたてゑめるむめかな　金津武雄子

冬の野にひとり笑かほをふくみつゝ　はるまちかねてにほふうめかな　横堀ふく子

降かゝるこすゑのゆきのひまことに　はる日もまたてにほふうめか香　河野文子

進み行くみよの春たにまちもあへす　おきてそにほふうめのはつはな　前澤幸子

きみか代の年のはしめにさく見れは　うめははるともかきらさりけり　高谷菊子

冬なれは東風ふくそともおもはぬに　いつこなるらんうめのかそする　平澤ふさ子

かならすは雪のしつくとあやまたん　はるまたてさくうめのはつはな　永井まり子

春またてうめのはつはなさきにけり　めくみのつゆやまつかゝるらん　畠山千代子

雪のうちに花のこゝろもとけ初めて　はるのこなたににほふうめか香　畠山雪子

いとはやもほゝゑむ梅はきみか世の　はるをむかふるすかたなるらん　木村千代子

白ゆきもまたふるとしのうちなから　ほころひそめぬうめのはつはな　河野多加子

たちのほる初日のかけにわかにはの　うめもひとしほ香ににほふなり　荒牧登子

ゆかしくも春よりさきにはな咲きぬ　みゆきのうちのうめのひともと　海島定子

久かたのはるのけしきはみえなくに　みさをしれとやうめのはな咲く　海島信子

おくれしと春のうちよりさきそめて　はるよりさきににほふうめか香　稲地ふく子

冬かれに見えにしうめのさく見れは　はるのとなりはちかきなるらん　佐治ふさ子

あたらしきとし迎へしうれしさに　はるまちあへすうめやさくらむ　静間密子

はる風はまたふかねともなつかしく　にほひそめけりうめのはつはな　小町谷里ね子

かならすはそれともたれか白ゆきの　したにはるまつうめのはつはな　山田榮子

ひと日つゝかすもそはりて梅か香の　にほふあたりははるこゝちせり　小幡千代子

我いほのかきねのうめはほころひぬ　はるもちかしと見ゆる今朝かな　小幡宮美代子

はつはなの匂ふもしらてうめかゝは　こほりのしたにはるやひそめる　山田久子

年の内にうめそ咲きけるうくひすは　はるとまかひてたづね來なかむ　遠藤乙[illegible]子

開け行く御代そしらろろうめのはな
　はろよりさきに咲き初めにけり　遠藤皆子

さしはなほのこれろ雪にうくひすの
　きなくはうめのさけばなりけり　青木辰子

やがて來む年のはじめのことほきに
　手をりても見んにはのうめかね　青木喜代子

うめの花にほふはやしに來て見れは
　またきにはるのこゝ地こそすれ　土肥仙子

さこしへに治まろみよないはふらん
　はろをばまたでうめさきにけり　大堀梢子

うくひすもまたおさつれぬ冬なから
　はやさきそめぬうめのひさはだ　松尾凿子

のさかなろ年のはしめをうめのはな
　ゑみながめつゝまちわたろらむ　波多野喜代子

うくひすもまたしらゆきのふろ中に
　にほひいてたろうめのはつはな　田中くに子

君がよのめぐみのつゆにうろほひて
　はろよりさきににほふうめかな　降田槇子

冬さらすはろもまたこぬなかゝきに
　ひさりゆかしくにほふうめかな　近山まつ子

しら雪もまた降ろさしのまぜの中に
　にほひ出にけりうめのはつはな　北川ぎん子

大み代のひかりのごけきけふなれば
　はろをもまたてうめはさくらん　碓井のぶ子

おくれじさ年のこなたにさきにけり　碓井たけ子

冬ながらほころひそめしうめのはな
　いろかこさなろうめのはつはな
　かはかりこそははろもにほはめ　岩崎今子

雪のうちにこんはろみせてさく梅は
　すゝみゆくよのすがたなろらん　鎌形恒子

けさみれは梅のはつはなさきにけり
　のさけきはろやまちかゝろらん　鎌形素子

梅のはな咲けろをみれはふゆなから
　はろになりゆくわかこゝろかな　川田こう子

春かせのふくをもまたて咲くうめの
　こゝろやいかにのさけかろらむ　中川浜江子

おくれてはかひなき物さうめのはな
　さしのうちより咲き出てにけん　野中あさ子

こよみにもまたなき春を志らするは
　ふゆ咲くうめの香をりなりけり　久門利ゑ子

きたまさは春にのこしてみなみより
　さきにほひたろうめのはつはな　森みれ子

ちかつけろ春のしをりさ年のうちに
　にほひそめたろにはのうめか枝　久松勢伊子

三ゆきふろ冬にはあれさうめのはな
　はろにかはらぬかにほにふなり　田津木久子

新らしきさしはちかしさいちはやく
　はろをもまたてにほふうめかな　眞鍋直子

冬こもりおもひもかけぬわかやさに
　いつしかかをろうめのはつはな　勝部しう子

君かよのふかきめくみにあくかれて
　はるをもまたぬうめのはつはな　津田德子

はるまたてはなのひもとく梅かえに
　ふるしらゆきのいさはれにけり　羽田三緒子

春またてにほひいたせるうめか香に
　さそはれくらんたにのうくひす　松原春子

はつ雪の消ゐのこりしさみるまてに
　こすゑににほふふゆのうめかな　大津千枝子

日影さすかたゐのうめのめつらしく
　はるよりさきににほひそめたり　遠山つれ子

來る春のいさなほさほきけふの日に
　はやかなるなりうめの三つ四つ　逵山まさ子

待ちかれし春はさなりになりにきを
　ほゝゑみそむるにはのうめかな　大海原芳子

のさかなるみよをうれしみ梅のはな
　はるをもまたてさきいてにけり　上柴きぬ子

君が代はふゆさしいへどのさけさに
　うめのはつはなさき初めにけり　太田貞子

冬もまたやゝながきにうめのはな
　はる待ちかねてにほひ初めたり　杉浦いさ子

梅のはな咲きしかすよりふゆの日の
　のこりすくなくなりにけるかな　館脇ます子

梅のはなにほひ初めたるふゆかれの
　そらさへはるのこゝちこそすれ　山本いさ子

ふたつみつ先づ咲きいてゝ梅のはな　大谷[illegible]琴子

　のさけき御代のはるを待つらん

数ふれはのころ日おほきふゆながら
　はるまちがほにうめかほるなり　吾妻ちか子

冬ながらに匂ひ初めたるうめの木の
　あたりははるのここちこそすれ　池谷みき子

なすことはおくれがちなる我やさに
　はるをもまたてにほふうめかな　林久子

進み行くみよのをしへにおくれしと
　はるにさきたつうめのはつはな　廣田さめ子

春來とも入りやはちなんわかいほの
　はいりのうめのまたきにほへは　今井幾久子

大かたのはるをもまたてさくうめは
　さかゆるみよのしるしなるらん　青木春子

匂はすばゆきのしつくもみまがはん
　はるにさきたつうめのはつはな　大久保みち子

ひらけゆく御代にならひて賑かやの
　うめもはるをはまたてさくらん　大橋てい子

大御代のひかりのさけきうめのはな
　はるをもまたてさきいてにけり　保坂以麻子

うちかちてうれしき色にうめのはな
　はるをもまたでさきそめにけり　稲澤喜代子

今年のみはるをおそしとまたれねは
　またきにうめのさけはなりけり　小松さだ子

ゆたかなる御世のめくにうめのはな
　はるさへまたてほゝゑみにけり　内田ひこ子

春またでうめのはつはな咲きにけり
のどけき御代のしるしなるらん　天野郁子

十二月廿日　兼題　歳暮（天地人の外かは原稿到着順なり）

天

長野縣長野町　太田貞子

年の初めのよろこびにそえて師の君より乙年のうちに成さむわざはいかになどねもごろにとはせたまひし折は去年の怠りの夢をもさましことしは殊になどきこえまゐらせしを飛鳥の川のいととく流れて此のとしもはや數ふるばかりになりぬあはれ何事をしてかはかくなどすぎにしあとを思ひめぐらすにも敷島の道の後れがちに文の林のかれ〴〵なるには今更うち驚かれてかきあげん言の葉もあらすなむ

としのうちに何をかしつと師の君に
とはれもしなばいかゞ答へむ

地

芝區三田四國町一ノ二十二番地　師岡千代子

いつはあれど年のくればかりあはれなるものはなし數ふるばかりの日になりぬれどやむことなきわたりをはしめて賤が伏屋にいたるまでそのほど〳〵におくりむかふるいとなみしけく積れるちりどもかき拂ひ門のしりくめなは齒固の用意などとり〴〵にいと事多しちまたをかよふ人は更なり空行く雲の足もつねとはことなる心地ぞせらるる道の傍の商人のうつ高く積みあげ處せく打ならへて物うるさまいといさましくにぎはゝし況して今年は征清の皇軍もめでたくをさまり臺灣の地さへ平きぬるからに其の賑はゝしさもいさましさもまた一層なるも大御稜威のかしこきにころされど幼き兒女どもの春まつめるさまの常の年にまされるもことはりなりやあはれ昨日と過ぎ今日とくらして廿八年の限となりぬ思ふことは十か一もなし得ず今年はことしはと過ぎ來しも幾年にかなりぬらん徒に年のみつもり行かんことと門のかざりの松竹にも恥しき心ちすれどまだ大御代の春の初にあはんと思へばこゝろに待ちいろかれてなむ

人

播磨龍野　直鍋直子

殘る日數もはやひと日ふた日の程とはなりにけりいつの年とてもかはらぬ事にしはあれどまたもや今年も夢の間にすぎぬ花にあこかれ月にうかれしとにもあらぬものからつねにいかて〳〵と思ひなから何事もなす事なくてかくむなしう過し事の口をしう甲斐なき身のまた更にうらめしうていとも〳〵年の名殘のをしまるる

になんされどいかにくやめどもはたいかにをしめども今はろのかひろなきた丶一とせなから事なくくらして老たるも若きもつ丶かなく打つとひてめてたき年を迎ふる事のみろいと〵〵うれしかりける

佐々有鄰子

何事もおくれかちなるが山里のならひなるに歳暮はかり都にさきたちていそがし妻木こりて市にはこびゆつる葉もろむき打て京にひさぎ姿等も學校の休業なれば朝は霜をふみて庭におり立ち夕は落葉かきつめて門をはらひ越てくる春の光を待つものから隣家の嫗のいそしく糸くる車のきしる音も耳にひびき向屋の翁のせはしく稲うの棚にはしる籾のつばら〵〵にうき世にとほきおもかげうかびていとど閑けき年の貢も終て埋火のけふりにざはふさまはなほ都のにぎはひにひきかへ山里の歳暮のゆかしさよ

河野多加子

花紅葉うれしく見つる春秋は今日此頃の樣に覺ねしがいつか年の暮れとはなりぬあなうれたしや腹立たゝしやなさてかく月日の過き行くことのすみやけき此事もかうして彼の事もあゝしてと兼て思ひしこと共は一つとして仕遂げし事のなくひま行くこまの足はやみ明治の廿まり八年もはや殘る日少なになりにたるに思へば今年ほどうれしき事悲しき事の一度にふり來にし年の又とあるべきかは去年よりのいくさに皇軍うち勝ちて清國に和を乞はしめかぞへきれぬほどの償金に台灣といふとも要めのところさへ我國に奉らしめしにげに昔の神功の大后の御事も思ひ出されて目でたしとも目でたしかゝるよろこびにつれては又悲しき事の極みにそのれそはいとも尊き竹の御園に生ひ出てましながら軍の君にましませし親王の御二かたまでかくれさせ玉ひし事なりあな御いたましのかぎりかなまた軍の男子たちのいくさのには又は病のためにみまかり玉ふ事幾百千々と云ふをしらず年の暮にかれこれ胸につまされてくたらぬ事をかくなん

思ふことはたしもやらていたつらに
またひとゝせをくらしけるかな

青木辰子

くれ行く歳のなごりこそうたてくもあはれなれ貴も賤も殘れる年を送り又來む春を迎へんとてあわたゞしくいそがはしく見ゆるに業なき己等まで何となく同じ思ひのせらるゝもをかしされどゆたかなるほとりはまだしもながら明日過さんかてもなく身に付くる衣うすくて寒に泣く輩は何を以て心よく此關を越ゆかんと思ひ行けばあはれもいとゞ深くてなん幼子等の打集ふ折々は新玉の樂をくり返しなどさすがに罪もなくをかしされど若し貧しき親々の此言の葉を聞きたらんには我子の上をも思ひ出でゝ一入のなげきは増すらんと思へば之れも涙のたれなりけりさるのみかは面白やと眺めし目の見る人もなきに衰けく澄み渡りて老たる色もなきあるは涼しき夏の夕ほたる追ひたる田の面の早や白霜にとぢられて落穂のかげもなきに北風のみ誰が爲めとやいとゞしう吹きすさぶなど何れもうき物の限りなりけり殊に心深う思さるゝはとやかくと心にたゝみ置し物事の其半もならずして空しく過せる月日のみとはなる事にぞあるいづれ此折は斯この物思ひこそ絶ねず多けれ

降田槇子

一年の月日ながきに似てながきにあらず花にうかれしやよひの空はいつしか金をも熔かす暑さとかはり木陰に涼みを取りし夏の夕べはやが

て虫のこゑ〴〵身にしむ秋の夜半となりまた雪降りしきる冬の寒さかはるなり梅なりて數ふれば今年もいつしか暮はてゝ三日四日ばかりの日數となりぬげに夢の間なりけりおのれ今年の始めに思ひ定めたりし事どもあまたありしが何れも半にも及ばでいたづらに暮るゝことの口惜しさよ今しばしの月日あらばと思ひめぐらしては過ぎこし方のみかこたるれどせんすべもなしさはあれど今年はいとさちなき年なりきから國との事平ぎしはいとうれしき事ながらかしこくも大君の御かたうでとも賴み給ひ萬の國民の仰ぎまゐらせたる竹の園生の親王御二方までも此世を後にし給ひなほ國の御柱とも云ふべき井上河野など云ふつかさ高き人々も同じ旅路に出で立ち給ひかてゝ加へて夏のころには惡き病さへはやりて幾そばくの青人草をなやましたるげに惡き年なりけりかゝる年ははやく去りて來ん年こそはうれしき事の數つもれかしさらばおのれも來ん春には心の駒にむちうちて學の道にいそしみ女のわざなどみがきなんなど思ひて文机のあたりにちらされたる書どもを取したためんとて何心なく開きたるに「明日ありと思ふ心にはかられて」との古歌のくだり出でたりあはれ明日をも知らぬ人の命いたづらに來ん年を賴みつるおのが心の愚さよ一日一時たりともあだに過ごすべきやは今年の名殘に片時たりともつとめはげまばやと思ひなほしてそのまゝ机にむかひて時の立つをも知らざりしはいと〳〵をこのわざなりかし

北川銀子

花や紅葉も名殘なく散り果てゝ世の習にいへる飛鳥川の水よりもいとゝ止まらぬは月日なりけり實に光陰は矢よりも早しとかや數ふれば今年もはや夢の間にくれ果てゝ殘る日數も少なくなりぬ何事をしつゝ此年を過しけんかれて學び果てん成しおほせんと思ひし事もみな半なる

なさ打つぶやくも甲斐なしこん年こそは心してと思へば僅かの日數も惜まれてにはかに文机に打向ひたるも時にとりてをかしうなん

碓井のぶ子

年〳〵にをだまきくりかへすごとくきのふといひけふとくらしつゝいつしかも今年の瀨波は打よせ來ぬ實に月日はせきもりなしとかやつれ〴〵心がけゐつるものからとて暮となりぬれば未だ思ふ一すぢだにもむすびはてずなんとはいへせめてはふるきこよみならましかば未だ三十日もありつれば此の身にとりてはまたいかにかなすこともありつらんにといまさらわぶるもかひなき業の限りなりかし

川田こう子

四つの時其折〳〵をあはれとめてはかなしとかこちつゝいつしかことしも暮近うなんなれりける今さら賤の小たまきくりかへすともかひなき事ながら數ならぬ身も父母のふかき惠にて十あまり七とせの體を何のわづらひもなく重ねしかいたづらに過しきて何事も人におくれがちなればつひには世のあたし人ともなりなんとおもはれて又一年をそへん事の苦しさは我身ならではしるものならめやされば人々の新玉の年の始の近つきぬとてまち喜ふめるも中々に思ひなされてひまゆく駒の關守もあらば一日なりとも止めまほしき年の暮よといとゝ思ひわづらふ折しも聲高く門松を賣歩く賤が心のあけなるぞうらやましき

田津木久子

今年もはや殘りすくなうなりぬれば何くれと春のまうけのいそがしかる中にをさなき人のおよびをりつゝいつかいつかとまちくらすにいさなはれてかくいたづらに年を重ぬるくやしさもかくばかりをしき年の終をも忘るゝばかりにいつしかとあたらしきとしのまたるゝもいとなかし

勝部しう子

昨日とくれ今日と暮して今年もいつしかくれ近うなりぬあたりの景色も何となうさひしけなるにいとゝやこむ春のいとなみせむなと さり〳〵忙しけなるもなかし鄙のさまはよくも知らねとわかすむ里なと 年々にかはらぬ今日此頃のさまいかにうれしからさらむ門田のおくてはや扱きをへて納屋になさむる俵の数々豊けきみ年の姿もみな集めし薪も高く積まれて來む春までの心つかひもなしをのこともは 新年の用にもとむしろ織るらむ音のかしましく松迎のとりさたなとかしまし女は子供ともの春衣さては酒づくり餅つきなと何くれと心せくさまなり されとその忙はしきか中にもなにとなく落ちゐたる樣の見ゐて世のおこたりものゝ今くれ知りたらむやうなるにも似やらすけに一と日〳〵おのかつとめにはけみなは今更ならぬ年の暮のとて何かあるへきなと思ひやられておのか身もいとはつかしうなむ

　つきに日によせてかへらぬ年なみを
　　あらてやひとのたちさわくらむ

津田德子

明けて暮れくれてはあくる世の中はれふらすに見る夢にそありけるけに隙ゆく駒の足早くきのふと過きけふとくらして一年またはてぬあはれ月日にきはみなけれとけふといふけふは またとあふへくもあらすけに世の中はゆめなりけり夢と過しつる今年のすきにし方おもひいつれは樂しきことくるしきことあるはうれしくあるはかなしくさま〳〵のふし多かりされとおもひかまへたることをはなかはをも爲し得て過しつるよと思へはそゞろにうら耻しくもまたかなし此うへは教の庭の若竹のしはし雪の下にも堪へしのはゞまた來ん春に遇はましとをしへの親に導かれて一筋に學ひの道をこそつとむへけれある聖の御教に一日の計は晨にあり一年の計は元旦にありと聞けはつれにこゝろゆるひなく人を待たぬとし月に遅れぬやう励みつとむへき事にこそかくしたゝむろいまといふ今も隙なくめくる時計の針早や午后九時を告けわたれり

　いま更にすきつるかたをおもふより
　　ひまゆくこまにおくれすもかな

今井幾久子

歲月の流れて早きにいつはあれと年の暮はかり心あわたゝしきはあらし此文も年の内に彼業も暮れぬ程にといいそしめとも日あしさへいと短くて思ひし半をも果さゝるに一時は一時に添へて大路行く人の足音のけたゝましくなり松ともひさきありく者の聲のしはかれ行くに家々にてきれならす音は却りてかすかになりぬとても今年も早やくれなんとそする者の人の「日遠きいそきはたゆみかちなり」と云ひける事の如く怠るとしは思はさりしもはかなくのみ過して又年を重ぬる事のはづかしさよあな年の暮かなかこつは姿のみならし焚くへき薪炊くへき飯たになきにおひめはたる鬼とか寄せくるに越すに越されぬ瀬戸と恨む者もありとかやあな年の暮なとかくは速かなる今年は例とは異なり御國の廣うなり出しいともめてたき年なれはわきて名残りのをしきものをと及はぬかことしつる折しも幼き妹のらうたき紅葉の掌に指一つ添へてこよひ寐なは新年よ姿ひ年も此れ程にならんよき衣着てん羽つきてん姉上如何に嬉しからすや見給へ七五三とものかさりおもしろやとていたく打よろこふにいつか心も引たてられてさなり〳〵事なくて送り迎ふるめてたさよ後れしは已か心からなり悔みはなと外にあらん來ん年こそ春の初めより心してん今ははかなきなけきにあたら時を送る時かは新しき年を迎ふる嬉しさも亦幼き人のみならんやわきて廣く

なりし御代のはても風静まりて迎ふる年なりと思へば心しきりにいさみ幼子には程々にいらひてことほきの文認めつる程に幼子は悦ひにつかれけん遊りさりて眠に就きぬ 如何にたのしき夢路にたどるかと歎しかくする程に夜も更けて御寺の鐘のひゞき一つ／＼と年の行方遠くなる心地するさても亦名殘なしきかな

手になれしこよみのまきの終りそと　くりかへしてもをしきけふかな

上柴絹子

昨日といひ今日とくらして世を飛鳥川にたとへけむ實にさなりや月日に關守なく今年もいつしかに年浪の流れて早く日數ふる程 白雪のふりうつむるにぞ年の名殘と知られぬる園生の梅はほゝゑみて谷の 戸いつる初音を聞かまほしけに ゆき間の若草は萌え出てゝ近つく春を樂むに似たりすへてとまらぬ 年の氣色こそ見るもののことにあはれなれ過きこし方をつく／＼と思ひかへせば霞たつ花のあした月おもしろき 夏の夜かりがねの鳴わたる夕みゆきつもれる冬の曙に一と せはまほろしの間にぞ然はあれと日數すくなになるまゝに行く年を惜む心もいつしかに指をりかぞへ春を待ちつゝ年はつる心こそいとあさましけれ しかはあれとも吾身のほとを かへりみれは何事をしりつとはなくくれ果てゝかへらぬむかしの今は戀しくいとはつかしうかなしくてなむ

大久保みち子

うしとのみ思ひ過しつる秋もいつしか暮れてかき數ふれば 殘りたる日數も少なく成にけり常にに心なく暮しし月日も 今さらのやうになごり惜うて何事してかは今年もと文机のあたりかい見れど かきあつめたる言の葉のなくて只いたづらに 秋の枯尾花招く力もなきことく巳の果敢なく暮ししなりこち流るゝ如き月と日をなしむ 間にあら玉の年たつ月日にも近うなりぬ姿が心の愚かさに年毎に暮れさし云へば悔まぬ年とてあらず 歳の暮の惜からばなど一日のくるゝも惜からざらん月の過ぐるも惜からざらんさるを春のあしたの花の香と錦おりなす 秋の月と浮るゝ心はいくそたびにか哀れ歳の暮れのみかこたんは 心のほども恥しうてなん

保坂以麻子

ゆく川のすぐる月日も草まくら旅のひとなりあはれ世の中は　道ゆく人はかり旅とはいふへしやけ

けに梓ゆみ春立しより年月の 射るかことくもおもほゆるかななといひつゝいつのまに五月來ぬらむ足曳の山ほとゝきす今ぞ鳴なると 驚かれきのふこそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよきて秋風のふくと かこちしまにはやくも門の小川は氷りつゝ賤がふせやにおとなふものは 樒なさそふ風はかりとはなりはてゝもしほ草やくなき身にも 年の數一つかさねん新玉の年立ちかへるも近くにはなりぬあはれ昨日といひ 今日とくらして飛鳥川 流れて早き月日なりけりとつく／＼おもひつゞくれは今年もあだにすき來てこの年おくる迄 只一つの事をただに仕とげし事はなかりしなりかく成てはまた 歎きてもかひなしいでやこん年よりは燒鎌のとこゝろをふるひ起して 事とものともなさましと今年もくれなんとするままにおもひいつることを後のためにとかくはしるしつ

内田ひこ子

年の殘り少うなるまゝひとことにいそきあへる頃 そものこゝろほそきものなるに吹きすさふ 風のおとすさましくいとあはれまされりけりやう／＼暮行 まゝやむことなきあたりはさらなりたきこる山かつにいたるまで 何くれとあわたゝしきが中 に春の いそきをもとりそへたるそあはれになかしけれまなひはてむなしはて なむとおもひしわささ

ふ牛たもいたらてなむあるをさても何邪なしてひさゝせをすくしけむ
さいまさらうちわふるもあやしうすゝろにやさしうなん

菊露　　諏訪晴子
なか月のなかきさかりのきくの上に
　おきあまりたるつゆのしらたま

山紅葉　　仝
をしほ山ちしほさゝむるもみちはの
　いろもしくれにふかくこそみれ

月　　津田德子
更けぬさは思ひしろくすめるよの
　つきをしみれはねられさりけり

殘菊　　大谷友子
おきそはる霜よりのちもにほふかな
　あきをへたてぬませのしらきく

紅葉　　仝
さまくににしきをかけてやま姫の
　千しほもゝしほてらすもみち葉

木枯　　神田樂子
さらぬたにねさめかちなる長き夜の
　まくらにひゝくこからしのかせ

きこはまるらす

一原稿はすべて、書きざま正しかるべし、文字のみだれたる、住所姓名のもれたるはとらず。

一兼題歌文は、ことに變体がなを用ひす、一字々々分明にしるさるべきこと、又歌一首の上に、上の句の中に二ところの漢字一字を用ひ他はみなかなを用ゐらるべし。

一必ず半紙を用ひて十六行、二十四字詰なるべきこと。

一毎紙國郡、町村、番地、姓名等つばらかにしるさるべきこと。

一五日兼題は前月廿五日二十日のは、その月の十日までに本社にとゞくやう御出しのこと、遲れたるはとらず

く海外に渡るは、唯物見遊山に行くにあらず、必各其の目的あり。されど學業にまれ、商業にまれ、或は他の種々の事業にまれ、決して疎忽に思はず、等閑に附せず、必此の目的を達し、志を遂げて、歸らざるべからず。若之に返して、一事一業をもなしとげずして歸りたらんには、實に臣民の務を盡さずして、此の大御歌に背くものと云ふべし。又假令外國には行かずとも、苟人と生れたるものには各其の行ふべき道あり。必しも大丈夫のみにあらざるなり。男子も女子も、各行くべき道を行き、聊もおほろかに思はずして、務めたらんには、上は天皇に對し奉りて忠義の臣となり、下は父母に對して孝、兄弟姉妹に對して悌、朋友に對して信となり、おのづから其の身も幸福の人となるべし。されど如何なる人にても、確乎不拔の誠心を以て、山岳崩れ太海覆へるが如き艱難辛苦に逢ふとも、身たじろがず、目まじろがず、泰然として之を排除し、其の目的志望を達する樣に、注意すべきなり。まして今日は。廣く外國と交際するを以て、威赫權變常に世に横行す。暫時も此の大御歌を忘れて、疎忽なる振舞をなして、思はぬ失敗を取るべからず。

皇后陛下

もつ人の心によりて寶ともあだともなるは黄金なりけり

一首の意は、黄金と云ふものは、天下の至寶なれども、是によりて、道を誤り身を害ふものあり。されど、此の黄金は、持つ人々の心によりて、或は寶ともなり、或は仇ともなるものぞ。人々能く此に心して、持つべきものなりと宣へるなり。

金錢は、人の一日もなかるべからざるものなれど、實に天下國家の至寶と云ふべきなり。然れども、此の金錢を持てるが爲に、或は人の人たる道を誤り、殘忍酷薄なる行をなし、人に恨まれ、世に卑しめられ、身を過ち、命を失へる例、世にれはし、若かゝる人にして、金錢なくぞ、さるあさましき事はあらざるべきに、至寶返りて仇となり、之が爲に此の憐むべき境隅に立ち至れるなり。諺に金が敵の世の中とは、之を云ふなり。古より、人の有様を見るに、賢人の富めるは少し。賢人は富貴に溺れず、利欲に迷はずして、常に仁を施し義を行ひ、博く衆を愛して道を守る。故に、己は常に貧しきなり。利に迷ひ物を貪る人は、金錢を貯ふる程にしたがひて、其の欲増長して飽くことを知らず。故に、仁と云ひ、義と云ひ、廉

恥と云ひ、博愛と云ふが如きは、顧みるに遑あらざるなり。世に、富人に貪慾なる人多くして、貧人に仁義なる人鮮なからざるは、是の故を以てなり。天下の至寶を以て、我が身の仇とするは、實に愚の極なり。世の中の人、宜しく此の至寶を以て至寶とせむことに注意すべきなり。

今上天皇陛下

千早振神ぞしるらむ民の爲世をやすかれと思ふ心は

千早振とは、神と云はん爲の枕詞なり。〇一首の意は、神は、顯幽ともに見知り給ふことなれど、必我が心の中も知り給ふなるべし。我は、我が一身を思ふに遑なく、唯一向に朝夕心を碎き、臣民が幸福に生活を營むことを得る樣に、世の中が安らかに治まらんことをのみ思へり。此の心は、人は知るまじけれども、神は定めて知り給ふならんと宣へるなり。

今上天皇陛下の叡明に渡らせ給ひ、聖德仁慈にまします事は、夙に天下の人の熟知する處なれば、今更述べ奉るにも及ばざるべしと雖も、今其の一つ二つを記し奉らむに、毎日朝早く起きさせ給ひて、先天神地祇及賢所等を拜し給ひ、而して

後に政治を取らせ給ふとぞ。是遠きを追ひ本に報ひさせ給ふ所なるべし。明治六年皇居火災にかゝりし後は、赤坂の假殿に遷らせ給ひ、明治二十二年まではしませり。是國財を省き、政費を倹約し給ふ大御心なり。此の御歌の如く、民安かれとのみ朝夕思し召し給へれど、元老院にて憲法を議せし時などは、毎日同院に臨御し、親しく之を聞こしめし給ひ、議員の少しく遲くるるものは、直に使を以て招集し給ひ、一日も欠かせ給ふことなく、又議會開會の時は、毎夜官報の至るを待ち、之を叡覽あらせられ、議事の進歩の如何を見給ひ、議會と政府と衝突せし時などは、殊に大御心を悩まさせ給ひしとぞ。其の政治に大御心を留め給へること、實に此の如し。又軍艦製造費に下し給はんとして、内庭の費を省かせ給へる時、宮内大臣を召して、朕が如きは如何にしてもよけれど、唯賢所の神供と、皇太后宮の朝夕の供御とは、少しも減ずべからずと仰せ給ひしかど、大臣は、其の御孝心の深くあらせ給ふに感泣して退きたりとかや。其の他、公益になる事業世道人心を維持すべき學校協會、或は天災等によりて、臣民の憂苦に沈淪せる時などは、必若干の金圓を下し給ふなど、御仁慈の深きこと、臣民たるもの誰か

感泣せざるものあらむ。皇后陛下も亦、天皇陛下に劣らせ給はず、常に臣民を愛撫し給へる事、皆人の拝知する所なり。あはれ明治の聖代に生れあへる臣民の幸福、何とか云はん。此の鴻大なる御恩徳に報ゆるには、如何にかすべき。忠孝友和信を以て經とし、恭儉博愛遵法義勇等を以て緯とし、上は天壌無窮の皇運を扶翼し奉り、國威を海外に輝し、下は祖先の遺風を顯彰し、一身をして忠良の臣とならしめむ、或は皇恩の萬分の一にも報い奉るに足らむか。

明治二十七年二月

修身百首　大尾

社告

本社、更ニ印刷器械數臺を增置し、且獨逸最新式の發動器械等、すゑ付のため、本月は二回ながら、遺憾にも、定期の發兌をおくらかしつ。來ん一月よりは、必ず期日をあやまらず發兌すべくなん。伏して罪を愛讀の君たちに謝し、併せて將來をちかふ。

明治廿八年十二月廿日　國光社

女子の本分　全

三版

近者、我邦女子道徳の頽敗に赴くこと、日また一日より甚し。三輪田刀自、之に慨する處あり。本邦固有の道徳に基きて、此の書を著し、以て我が邦の婦女子に、其の本分のある處を示さんことを期せらる。本社の一たび、之を世に公にするや、忽にして、一再版を賣盡し今や三版の成るを告ぐ。請ふ。續々御注文あらんことを。

目録

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
（電話一九四六）

● 賣捌所

東京　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　同　大坂　京都　仙臺　名古屋　同　福岡　熊本　同　千葉　同　同　同　同　同　德島

東京堂　東海堂　文海堂　北隆館　信文堂　良明堂　武藏屋　文金堂　小林新兵衛　目黑支店　三省堂　岩見屋支店　大倉書店　小林尚文館　笠原岩吉　岡島書店　東枝律書房　高橋書店　川瀬書店　片岡書店　積善館　長崎書店　宮松幸吉　平野常吉　堤安五郎　高寺清兵衛　根本紋二郎　吉田德兵衛　東定藏　多田屋本店　黑崎橋二

女鑑第九十九號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊（三ヶ月分）	十二冊（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十八年十二月十九日印刷
同　年十二月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所（電話番號一九四六）　國光社